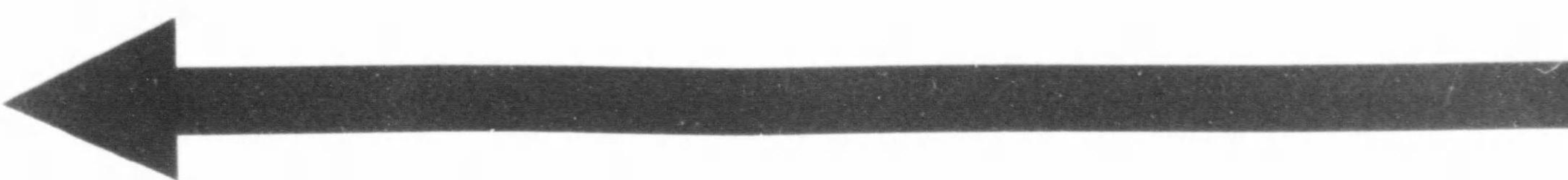
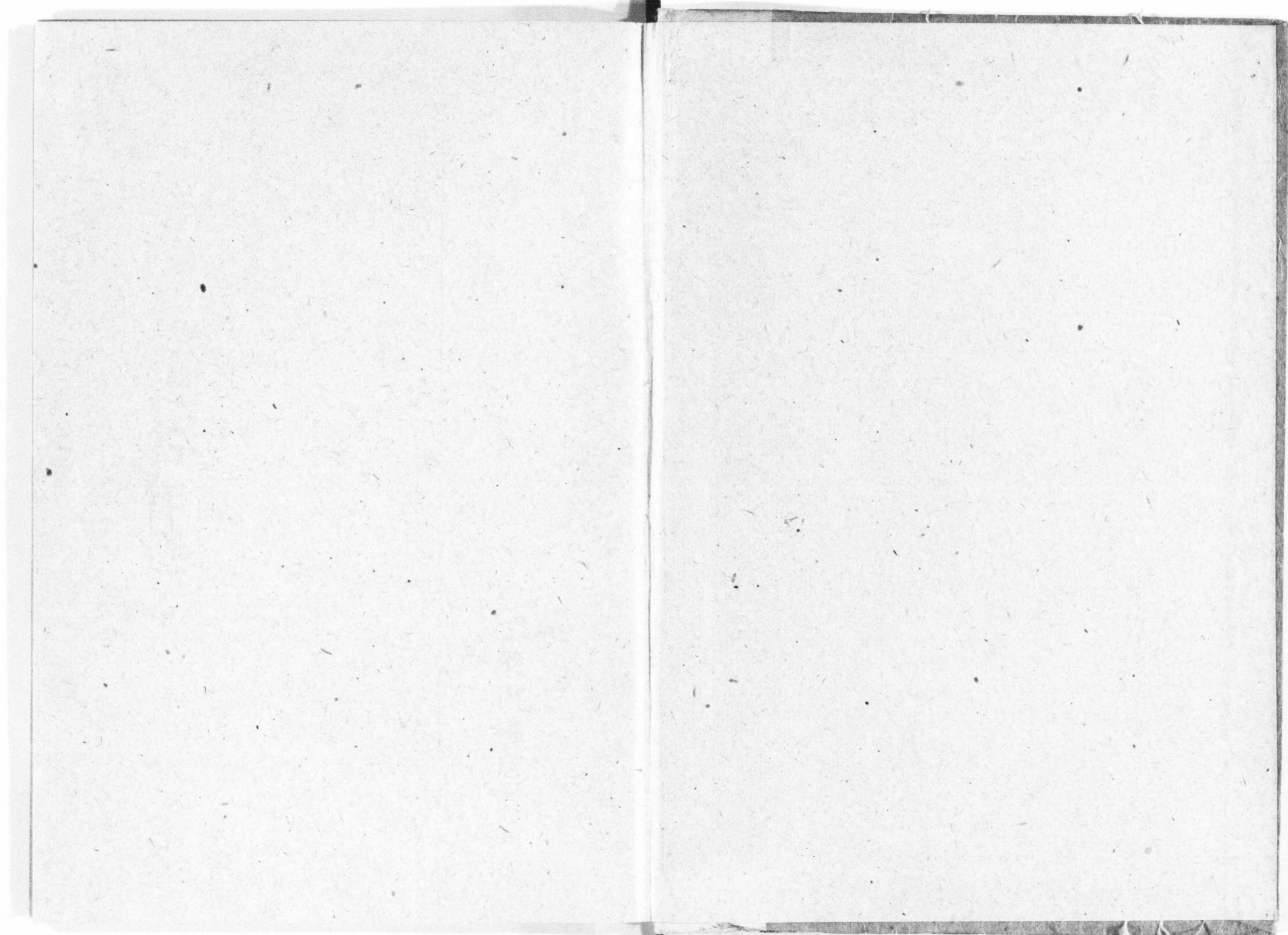


始





宮沢賢治

名作選
下

羽田書店版

910
271
271



22812

目次

春……………三二

稲作挿話……………三二

野の師父……………三七

和風は河谷いつばいに吹く……………三五

風の又三郎……………三一

岩手公園……………四〇

橋場線七つ森下を過ぐ……………四二

鳥	百	態	四四	
旱	害	地	帯	四六
月	天	上	穹	四七
早		春	四五	
選		舉	四三	
老		農	四五	
北	守	將	軍	と	三
				人	兄
				弟	の
				醫	者
				四五
				グ	ス
				コ	ー
				ブ	ド
				リ	の
				傳	記
				四八
				農	民
				藝	術
				概	論
				網	要
				四四
				雨	ニ
				モ	マ
				ケ	ズ
				五一

手	紙	(一)	五四
手	紙	(二)	五九

宮澤賢治略歴
後記

宮澤賢治名作選 下



陽が照つて鳥が啼き

あちこちの檜の林も

けむるとき

ぎちぎちと鳴る汚い掌を

おれはこれからもつことになる

稲作挿話

あすこの田はねえ

あの種類では窒素があまり多過ぎるから

もうきつぱりと灌水を切つてね

三番除草はしないんだ

……一しんに畔を走つて来て

青田のなかに汗拭くその子……

燐酸がまだ残つてゐない？

みんな使つた？

それではもしもこの天候が

これから五日續いたら

あの枝垂れ葉をねえ

斯ういふ風な枝垂れ葉をねえ

むしつてとつてしまふんだ

……せはしくうなづき汗拭くその子

冬講習に來たときは

一年はたらいいたあととは言へ

まだかがやかな苹果のわらひをもつてゐた

いまはもう日と汗に焼け

幾夜の不眠にやつれてゐる……

それからいいかい

今月末にあの稲が

君の胸より延びたらねえ

ちやうどシャツツの上のぼたんを定規ぢやうぎにしてねえ
葉尖はさきを刈つてしまふんだ

……汗だけでない

涙なみだも拭いてゐるんだな……

君が自分でかんがへた

あの田もすつかり見て来たよ

陸羽一三二號のはうね

あれはすゐぶん上手に行つた

肥えも少しもむらがないし

いかにも強く育つてゐる

硫酸だつてきみが自分で播まいたらう

みんながいろいろ言ふだらうが

あつちは少しも心配ない

反當たんあたり三石二斗なら

もうきまつたと言つていい

しつかりやるんだよ

これからの本當の勉強はねえ

テニスをしながら商賣の先生から

義理で教はることでないんだ

きみのやうにさ

吹雪やわづかの仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴ふいて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい學問のはじまりなんだ

ではさやうなら

……雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ……

野の師父

萱もたほれ稲もたほれて

野はらはいちめんとむらふやうな水けむり

この雷鳴と黒雲のなかで

ひとりきちんと椽えだにすわり

師父よあなたが正しく坐り

そらのけはいをきいてゐられますことは

何たる私への慰めでせう

……額はきざみその眼はうつろ

夜とあけがたに草を刈り

冬も手織の麻を着て

七十年を數へたひとを

またいなづまが洗つて過ぎる……

七十年が過ぎ去れば

あなたのせなは松より圓く

あなたの指はかじかまり

あなたの額は雨や日や

あらゆる辛苦の圖式を刻み

あなたの瞳は洞ほらよりうつろ

この野とそらのあらゆる相は

あなたのなかに複本ふくほんをもち

それらの變化の方向や

その作物への影響は

たとへば風のことばのやうに
あなたののどにつぶやかれます
しかもあなたのおももちの
今日は何たる明るさでせう

豊かな稔みのりを願へるままに

二千の施肥の設計を終へ

その稲いまやみな穂を抽ひいて

花をも開くこの日ごろ

四日つづいた烈しい雨と

今朝からこの雷雨のために

あちこち倒れもしましたが

なほもし明日或は明後

日をさへ見ればみな起きあがり

恐らく所期の結果も得ます

さうでなければ村村は

今年もまた暗い冬を迎へるのです

……どの松のはやしもみな雲とすれすれ

幾層ものつつみは灰いろにあふれて

そこらはいちめん

ただ桃いろの稻づまばかり……

この雷と雨との音に

再び物言ふことの甲斐なさに

わたしは黙つて立つばかり

しかもあなたのおももちの

その不安ない明るさは

一 昨年の夏 ひでりのそらを

見上げたあなたのけはいもなく

わたしはいま自信に満ちて

ふたたび村をめぐらうとします

わたくしが去らうとして

一瞬あなたの額の上に

不安な雲のうかび出て

ふたたび明るく晴れるのは

それが何かを推せんとして

恐らく百の種類を数へ

思ひを盡してつひに知り得ぬものであります

師父よもしもやそのことが

口耳の學をわづかに修め

鳥のごとくに輕佻な

わたくしに關することでありませうならば

師父よあなたの眼力をつくし

あなたの聽力のかぎりをもつて

わたくしのまなこを正視し

わたくしの呼吸をお聞き下さい

古い白麻の洋服を着て

やぶれた絹張の洋傘はもちながら

尙わたくしは

諸佛菩薩の護念によつて

あなたが朝ごと誦せられる

かの法華經の壽量の品を

命をもつて守らうとするものであります

それでは師父よ

何たる天鼓の轟きでせう

何たる光の淨化でせう

わたくしは而して

あなたに別れの禮をばします

和風は河谷いつばいに吹く

汗にまみれたシャツも乾けば

熱した額やまぶたも冷える

ああ

南からまた西南から

和風は河谷いつばいに吹いて

起きあがつたいちめんの稲穂を波立て

葉ごとの暗い露を落して

和風は河谷いつばいに吹く

あらゆる辛苦の結果から

七月稻はよく分けつし

豊かな秋を示してゐたが

この八月のなかばのうちに

十二の赤い朝焼けと

湿度九十の六日を數へ

莖稈弱く徒長して

穂も出し花もつけながら

つひに昨日のはげしい雨に

次から次と倒れてしまひ

とどには雨のしぶきのなかに

とむらふやうなつめたい霧が

倒れた稻を被つてゐた

しかもわたくしは豫期してゐたので

やがての直りを言はうとして
きみの形を求めたけれども
きみはわたくしの姿をさけ
雨はいよいよ降りつづのり
遂にはここも水でいつぱい
晴れさうなけはいもなかつたので
わたくしはとうとう氣狂ひのやうに
あの雨のなかへ飛び出し
測候所へも電話をかけ
村から村をたづねてあるき
聲さへ涸れて
凄まじい雷光りのなかを
夜更けて家に歸つて来た

けれどもさうして遂に睡らなかつた
さうしてどうだ
今朝黄金の薔薇東はひらけ
雲ののろしはつぎつぎのほり
高壓線もごうごう鳴れば
激んだ霧もはるかに翔けて
とうとう稲は起きた
まつたくのいきもの
まつたくの精巧な機械
稲がそろつて起きてゐる
雨のあひだまつてゐた顔は
いま小さな白い花をひらめかし
しづかな飴いろの日だまりの上を

赤いどんぼもすると飛ぶ
あわれわれはこどものやうに
踊つても踊つても尙足りない
もうこの次に倒れても
稲は断じてまた起きる
今年のかういふ濕潤さでも
なほかうだとするならば
ああ自然はあんまり意外で
そしてあんまり正直だ
百に一つなからうと思つた
あんな恐ろしい開花期の雨は
もうまつかうからやつて来て
力を入れたほどのものを

みんなばたばた倒してしまつた
その代りには
その十に一つもなからうと思つた
不良な條件をみんな被つて
豫期したいちばん悪い結果を見せたのち
こんどはもはや
十に一つも起きれまいと思つてゐたものが
わづかの苗のつくり方のちがひや
磷酸のやり方のために
今日はそろつてみな起きてゐる
もう村ごとの反當に
四石の稲はかならずとれる
森で埋めた地平線から

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いつばいでした。黒い雪袴ゆきかまをはいた二人の一年生の子がどてをまはつて運動場にはいつて来て、まだほかに誰も来てゐないのを見て、

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかはるがはる叫びながら大悦よろこびで門をはいつて来たのでしたが、ちよつと教室の中を見ますと、一人ともまるでびつくりして棒立まくだちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるへましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまひました。といふわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないをかした赤い髪かみの子供がひとり、一番前の机にちやんと坐つてゐたのです。そしてその机といつたらまつたくこの泣いた子の自分の机だったので。

もひとりの子ももう半分泣きかけてゐましたが、それでもむりやり眼をりんと張つて、そつちの方をにらめてゐましたら、ちやうどそのとき、川上から、

「ちやうはあかぐり、ちやうはあかぐり。」と高く叫ぶ聲がして、それからまるで大きな鳥のやうに嘉助がかばんをかかへてわらつて運動場へかけて来ました。と思つたらすぐそ

のあとから佐太郎だの耕助だのどやどややつてきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かないこどもの肩をつかまへて言ひました。するとその子もわあと泣いてしまひました。をかしいとおもつてみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のをかした子がすまして、しやんとすわつてゐるのが目につきました。

みんなはしんとなつてしまひました。だんだんみんな女の子たちも集つて來ましたが、誰も何とも言へませんでした。

赤毛の子どもは一向こはがる風もなくやつぱりちやんと坐つて、じつと黒板を見てゐます。すると六年生の一郎が來ました。一郎はまるでおとなのやうにゆつくり大股にやつてきて、みんなを見て、

「何した。」と聞きました。

みんなははじめてがやがや聲をたてて、その教室の中の變へんな子を指ゆびさしました。一郎はしばらくそつちを見てゐましたが、やがて鞆かばんをしつかりかかへて、さつさと窓の下へ行きま

した。

みんなもすっかり元氣になつてついて行きました。

「誰だ、時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはひのぼつて教室の中へ顔をつき出して言ひました。

「お天氣のいい時教室さ入つてゐるけど先生にうんと叱らへるぞ。」窓の下の耕助が言ひました。

「叱らへでもおら知らないよ。」嘉助が言ひました。

「早く出はつて來、出はつて來。」一郎が言ひました。けれどもそのこどもはきよきよろ室の中やみんなの方を見るばかりで、やつぱりちやんとひさに手をおいて腰掛に坐つてゐました。

ぜんたいその形からが實にをかしいのでした。變てこな鼠いろのだぶだぶの上着を着て、白い半すぼんをはいてそれに赤い革の半靴をはいてゐたのです。

それに顔と言つたらまるで熱した苹果のやう、殊に眼はまん圓でまつくろなのでした。

一向語が通じないやうなので一郎も全く困つてしまひました。

「あいつは外國人だな。」

「學校さ入るのだな。」みんなはがやがやが言ひました。ところが五年生の嘉助がいきなり、

「ああ三年生さ入るのだ。」と叫びましたので、

「ああさうだ。」と小さいこどもらは思ひましたが、一郎はだまつてくびをまげました。

變なこどもはやはりきよきよろこつちを見るだけで、きちんと腰掛けてゐます。

そのとき風がどうと吹いて來て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、學校のうしろの山の萱や栗の木はみんな變に青じろくなくなつてゆれ、教室のなかのこどもは何だかにやつとわらつてすこしうごいたやうでした。

すると嘉助がすぐ叫びました。

「ああわかつた。あいつは風の又三郎だぞ。」

さうだつとみんなもおもつたとき、俄かにうしろの方で五郎が、

「わあ、痛いぢやあ。」と叫びました。

みんなそつちへ振り向きますと、五郎が耕助に足のゆびをふまれて、まるで怒つて耕助をなぐりつけてゐたのです。すると耕助も怒つて、

「わあ、われ悪くてでひと撲いだなあ。」と言つてまた五郎をなぐらうとしました。

五郎はまるで顔中涙だらけにして耕助に組み付かうとしました。そこで一郎が問へはいつて嘉助が耕助を押へてしまひました。

「わあい、喧嘩するなつたら、先生あちやんと職員室に来てらぞ。」と一郎が言ひながらまた教室の方を見ましたら、一郎は俄かにまるでぼかんとしてしまひました。

たつたいままで教室にゐたあの變な子が影もかたちもないのです。みんなもまるでせつかく友達になつた子うまが遠くへやられたやう、せつかく捕つた山雀に逃げられたやうに思ひました。

風がまたどうと吹いて来て窓ガラスをがたがた言はせ、うしろの山の萱をだんだん上流の方へ青じろく波だてて行きました。

「わあ、うなだ喧嘩したんだがら又三郎居なくなつたな。」嘉助が怒つて言ひました。

みんなもほんたうにさう思ひました。五郎はじつに申しわけないと思つて、足の痛いのも忘れてしよんぼり肩をすぼめて立つたのです。

「やつぱりあいつは風の又三郎だつたな。」

「二百十日で来たのだな。」

「靴はいでだたぞ。」

「服も着でだたぞ。」

「髪赤くてをかしやつだつたな。」

「ありやありや、又三郎おれの机の上さ石かけ乗せでつたぞ。」二年生の子が言ひました。見るとその子の机の上に汚ない石かけが乗つてゐたのです。

「さうだ、ありや。あそこのガラスもぶつかしたぞ。」

「そでないであ。あいづあ休み前に嘉助石ぶつつけたのだな。」

「わあい。そでないであ。」と言つてゐたとき、これはまた何といふ譯でせう。先生が玄

關から出て來たのです。先生はびかびか光る呼子よびこを右手にもつて、もう集れの支度をしてゐるのですが、そのすぐうしろから、さつきの赤い髪の子が、まるで權現ごんげんさまの尾つぼ持ちのやうにすまし込んで、白いシャツボをかぶつて、先生についてすばすばとあるいて來たのです。

みんなはしいんとなつてしまひました。やつと一郎が「先生お早うございます。」と言ひましたのでみんなもついて、

「先生お早うございます。」と言つただけでした。

「みなさん。お早う。どなたも元氣ですね。では並んで。」先生は呼子よびこをビルルと吹きました。それはすぐ谷の向ふの山へひびいてまたビルルと低く戻つて來ました。

すつかりやすみの前の通りだとみんなが思ひながら六年生は一人、五年生は七人、四年生は六人、一、二年は十二人、組ごとに一列に縦たてにならびました。

二年は八人、一年生は四人前へならへをしてならんだのです。

するとその間あのをかした子は、何かをかしいのかおもしろいのか奥齒で横つちよに舌

を噛むやうにして、じろじろみんなを見ながら先生のうしろに立つてゐたのです。すると先生は、高田さんこつちへおはいりなさいと言ひながら五年生の列のところへ連れて行つて、丈せを嘉助とくらべてから嘉助のそのうしろのきよの間へ立たせました。

みんなはふりかへつてじつとそれを見てゐました。

先生はまた玄關の前に戻つて、

「前へならへ。」と號令をかけました。

みんなはもう「べん前へならへ」をしてすつかり列をつくりましたが、じつはあの變な子がどういふ風にしてゐるのか見たくて、かはるがはるそつちをふりむいたり横眼よこめでにらんだりしたのでした。するとその子はちゃんと前へならへでもなんでも知つてゐるらしく平氣で兩腕を前へ出して、指さきを嘉助のせなかへやつと届とどくくらゐにしてゐたものですから、嘉助は何だかせなかがかゆく、くすぐりたいといふ風にもちもちしてゐました。

「直れ。」先生がまた號令をかけました。

「一年生から順に前へおい。」そこで一年生はあるき出し、間もなく二年生もあるき出し

てみんなの前をぐつと通つて、右手の下駄箱のある入口に入つて行きました。四年生があらき出すとさつきの子も嘉助のあとへついて大威張りであるいて行きました。前へ行つた子もときどきふりかへつて見、あとの者もじつと見てゐたのです。

まもなくみんなははきものを下駄箱に入れて教室へ入つて、ちやうど外へならんだときのやうに組ごとに一列に机に坐りました。さつきの子もすまし込んで嘉助のうしろに坐りました。ところがもう大さわぎです。

「わあ、おらの机さ石かけ入つてるぞ。」

「わあ、おらの机代つてるぞ。」

「キツコ、キツコ、うな通信簿持つて来たが。おら忘れで来たぢやあ。」

「わあい、その木ペン借せ、木ペン借せつたら。」

「わあがない。ひとの雑記帳とつてつて。」

そのとき先生が入つて來ましたのでみんなもさわぎながらとにかく立ちあがり、一郎がいちばんうしろで、

「禮。」と言ひました。

みんなはおじぎをする間はちよつとしんとなりましたが、それから又がやがやがや言ひました。

「しづかに、みなさん。しづかにするのです。」先生が言ひました。

「叱つ、悦治、やがましつたら、嘉助え、喜つこう、わあい。」と一郎が一番うしろからあまりさわぐものを一人づつ叱りました。

みんなはしんとなりました。

先生が言ひました。

「みなさん、長い夏のお休みは面白かつたですね。みなさんは朝から水泳ぎもできたし、林の中で鷹にも負けないくらい高く叫んだり、また、兄さんの草刈りについて上の野原へ行つたりしたでせう。けれどももう昨日で休みは終わりました。これからは第二學期で秋です。むかしから秋は一番からだもころもひきしまつて、勉強のできる時だといつてあるのです。ですから、みなさんも今日から又いつしよにしつかり勉強しませう。それからこ

のお休みの間にみなさんのお友達が一人ふえました。それはそこに居る高田さんです。その方のお父さんはこんど會社のご用で上の野原の入り口へおいでになつてゐられるのです。高田さんはいままで北海道の學校に居られたのですが、今日からみなさんのお友達になるのですから、みなさんは學校で勉強のときも、また栗拾ひや魚とりに行くときも、高田さんをさそふやうにしなければなりません。わかりましたか。わかつた人は手をあげてごらん下さい。」

すぐみんなは手をあげました。その高田とよばれた子も勢よく手をあげましたので、ちよつと先生はわらひましたが、すぐ、

「わかりましたね、ではよし。」と言ひましたのでみんなは火の消えたやうに一ぺんに手をおろしました。

ところが嘉助がすぐ、

「先生。」といつてまた手をあげました。

「はい。」先生は嘉助を指さしました。

「高田さん名は何て言ふべな。」

「高田三郎さんです。」

「わあ、うまい、そりや、やつぱり又三郎だな。」嘉助はまるで手を叩いて机の中で踊るやうにしましたので、大きな方の子どもらはどつと笑ひましたが、下の子どもらは何か怖いといふ風にしいんとして三郎の方を見てゐたのです。

先生はまた言ひました。

「今日みなさんは、通信簿と宿題をもつてくるのでしたね。持つて來た人は机の上へ出して下さい。私がいま集めに行きますから。」

みんなはばたばた靴をあげたり風呂敷をといたりして、通信簿と宿題を机の上に出しました。そして先生が一年生の方から順にそれを集めはじめました。そのときみんなはぎよつとしました。といふ譯はみんなのうしろのところいつか一人の大人が立つてゐたのです。その人は白いだぶだぶの麻服を着て黒いてかてかした手巾をネクタイの代りに首に巻いて、手には白い扇をもつて軽くじぶんの顔を扇ぎながら少し笑つてみんなを見おろして

わたのです。さあみんなはだんだんしいんとなつて、まるで堅くなつてしまひました。

ところが先生は別にその人を氣にかける風もなく、順順に通信簿を集めて三郎の席まで行きますと、三郎は通信簿も宿題帳しゅくだいちょうもない代りに両手をにぎりこぶしにして、二つ机の上のせてわたのです。先生はだまつてそこを通りすぎ、みんなのを集めてしまふとそれを両手でそろへながらまた教壇に戻りました。

「では宿題帳はこの次の土曜日に直して渡しますから、今日持つて來なかつた人は、あしたきつと忘れないで持つて來てください。それは悦治さんと勇治さんと良作さんとですね。では今日はここまでです。あしたからちゃんといつもの通りの支度をしてお出でなさい。それから四年生と六年生の人は、先生といつしよに教室のお掃除さうじをしませう。ではここまで。」

一郎が氣を付け、と言ひみんなは一ぺんに立ちました。うしろの大人も扇を下にさげて立ちました。

「禮。」先生もみんなも禮をしました。うしろの大人も軽く頭を下げました。それからす

うつと下の組の子どもらは一目散に教室を飛び出しましたが、四年生の子どもらはまだもぢもぢしてゐました。

すると三郎はさつきのだぶだぶの白い服の人のところへ行きました。

「いやどうも苦勞さまでございます。」その大人はていねいに先生に禮をしました。

「ぢきみんなとお友達になりますから。」先生も禮を返しながら言ひました。

「何分どうかよろしくおねがひいたします。それでは。」その人はまたていねいに禮をして眼で三郎に合圖あひづすると、自分は玄關の方へまはつて外へ出て待つてゐますと、三郎はみんなの見てゐる中を、眼をりんとはつて、だまつて昇降口から出て行つて追ひつき、二人は運動場を通つて川下の方へ歩いて行きました。

運動場を出るときその子はこつちをふりむいて、じつと學校やみんなの方をにらむやうにすると、またすたすた白服の大人について歩いて行きました。

「先生、あの人は高田さんのお父さんですか。」一郎が箒はらきをもちながら先生にききました。「さうです。」

「何の用で来たべ。」

「上の野原の入口にモリブデンといふ鑽石ができるので、それをだんだん掘るやうにする爲ださうです。」

「どこらあたりだべな。」

「私もまだよくわかりませんが、いつもみなさんが馬をつれて行くみちから、少し川下へ寄つた方なやうです。」

「モリブデン何にするべな。」

「それは鐵とまぜたり、薬をつくつたりするのださうです。」

「そだら又三郎も掘るべが。」 嘉助が言ひました。

「又三郎だない。高田三郎だぢや。」 佐太郎が言ひました。

「又三郎だ、又三郎だ。」 嘉助が顔をまつ赤にしてがん張りしました。

「嘉助、うなも残つてらば、掃除してすけろ。」 一郎が言ひました。

「わあい。やんだぢや。今日四年生ど六年生だな。」

嘉助は大急ぎで教室をはねだして遁げてしまひました。

風がまた吹いて来て窓ガラスはまたがたと鳴り、雑巾を入れたバケツにも小さな黒い波をたてました。

次の日一郎はあのをかした子供が、今日からほんたうに學校へ来て、本を讀んだりするかどうか早く見たいやうな氣がして、いつもより早く嘉助をさそひました。ところが嘉助の方は、一郎よりもつとさう考へてゐたと見えて、とうにごはんもたべ、ふろしきに包んだ本ももつて家の前へ出て一郎を待つてゐたのでした。二人は途中もいろいろその子のことを談しながら學校へ來ました。すると運動場には小さな小供らがもう七八人集つてゐて、棒かくしをしてゐましたがその子はまだ來てゐませんでした。また昨日のやうに教室の中に居るのかと思つて中をのぞいて見ましたが、教室の中はしいんとして誰も居ず、黒板の上には昨日掃除のとき雑巾で拭いた痕が乾いてぼんやり白い縞になつてゐました。

「昨日のやぶまだ来てないな。」一郎が言ひました。

「うん。」嘉助も言つてそこらを見まはしました。

一郎はそこで鐵棒の下へ行つて、ずやみ上りといふやり方で、無理やりに鐵棒の上のほり兩腕をだんだん寄せて右の腕木うでぎに行くと、そこへ腰掛けて昨日三郎の行つた方をじつと見おろして待つてゐました。谷川はそつちの方へきらきら光つてながれて行き、その下の山の上の方では風も吹いてゐるらしく、ときどき萱かやが白く波立つてゐました。

嘉助もやつぱり柱の下でじつとそつちを見て待つてゐました。ところが二人はそんなに永く待つこともありませんでした。それは突然三郎がその下手のみちから灰いろの鞆を右手にかかへて走るやうにして出て來たのです。

「來たぞ。」と一郎が思はず下に居る嘉助へ叫ぼうとしてゐますと、早くも三郎はどてをぐるつとまはつて、どんどん正門を入つて來ると、

「お早う。」とはつきり言ひました。みんなはいつしよにそつちをふり向きましたが、一人も返事をしたものがありませんでした。

それは返事をしないのではなく、みんなは先生にはいつでも「お早うございます。」といふやうに習つてゐたのですが、お互にさういふ風に立派に「お早う。」なんて言つたことがなかつたのに三郎にさう言はれ、一郎や嘉助はあんまりにはかで、又勢がいいのでとうとう臆おそせてしまつて一郎も嘉助も口の中でお早うといふかはりに、もにやもにやつと言つてしまつたのでした。

ところが三郎の方はべつだんそれを苦にする風もなく、二三歩又前へ進むとそのまつ黒な眼でぐるつと運動場ぢゆうを見まはしました。そしてしばらく誰か遊ぶ相手がないかさがしてゐるやうでした。けれどもみんなきよろきよろ三郎の方はみてゐても、やはり忙いそしさうに棒かくしをしたり三郎の方へ行くものがありませんでした。三郎はちよつと工合あひが悪いやうにそこにつつ立つてゐましたが、又運動場をもう一度見まはしました。

それからぜんたいこの運動場は何間あるかといふやうに、正門から玄關まで大股おほまたに歩數を數へながら歩きはじめました。一郎は急いで鐵棒をはねおりて嘉助とならんで、息をこらしてそれを見てゐました。

そのうち三郎は向ふの玄関の前まで行つてしまふと、こつちへ向いてしばらく暗算をするやうに少し首をまげて立つてゐました。

みんなはやはりきよろきよろそつちを見てゐます。三郎は少し困つたやうに両手をうしろへ組むと向ふ側の土手の方へ、職員室の前を通つて歩きだしました。

その時風がざあつと吹いて来て土手の草はざわさわ波になり、運動場のまん中でざあつと塵が上がり、それが玄関の前まで行くときりきりとまはつて小さなつむじ風になつて、黄いろな塵は瓶をさかさまにしたやうな形になつて屋根より高くのぼりました。すると嘉助が突然高く言ひました。

「さうだ。やつぱりあいづ又三郎だぞ。あいづ何かするときつと風吹いてくるぞ。」

「うん。」一郎はどうだかわからないと思ひながらもだまつてそつちを見てゐました。三郎はそんなことにはかまはず土手の方へやはりすたすた歩いて行きます。

そのとき先生がいつものやうに呼子をもつて玄関を出て来たのです。

「お早うございます。」小さな子どもらはみんな集りました。

「お早う。」先生はちらつと運動場を見まはしてから、「ではならんで。」と言ひながらピルルツと笛を吹きました。

みんな集つてきて昨日のとほりきちんとならびました。三郎も昨日言はれた所へちやんと立つてゐます。

先生はお日さまがまつ正面なので、すこしまぶしさうにしながら號令をだんだんかけて、とうとうみんなは昇降口から教室へ入りました。そして禮がすむと先生は、

「ではみなさん、今日から勉強をはじめませう。みなさんはちやんとお道具をもつてきましたね。では一年生と二年生の人はお習字のお手本と硯と紙を出して、四年生の方は算術帳と雑記帳と鉛筆を出して、五年生と六年生の方は國語の本を出してください。」

さあするとあつちでもこつちでも大さわぎがはじまりました。中にも三郎のすぐ横の四年生の机の佐太郎が、いきなり手をのばして二年生のかよの鉛筆をひらりととつてしまつたのです。かよは佐太郎の妹でした。するとかよは、

「うわあ兄な木ペン取つてわかんないな。」と言ひながら取り返さうとしますと佐太郎が、

「わあこいつおれのだなあ。」と言ひながら鉛筆をふところの中へ入れて、あとは支那人がおじぎするときのやうに両手を袖へ入れて、机へびつたり胸をくつつけました。するとかよは立つて来て、

「兄な、兄なの木ペンは昨日小屋で無くしてしまつたけなあ。よこせつたら。」と言ひながら一生けん命とり返さうとしましたが、どうしてももう佐太郎は机にくつついた大きな蟹の化石みたいになつてゐるので、とうとうかよは立つたまま口を大きくまげて泣きだしさうになりました。

すると三郎は國語の本をちやんと机にのせて困つたやうにしてこれを見てゐましたが、かよがとうとうぼろぼろ涙をこぼしたのを見ると、だまつて右手に持つてゐた半分ばかりになつた鉛筆を佐太郎の眼の前の机に置きました。

すると佐太郎ははかに元氣になつて、むつくり起き上りました。そして、

「呉れる？」と三郎にききました。三郎はちよつとまごついたやうでしたが覺悟したやうに、

「うん。」と言ひました。すると佐太郎はいきなりわらひ出してふところの鉛筆をかよの小さな赤い手に持たせました。

先生は向ふで一年生の子の硯に水をついでやつたりしてゐましたし、嘉助は三郎の前ですから知りませんでした。一郎はこれをいちばんうしろでちやんと見てゐました。そしてまるで何と言つたらいいかわからない、變な氣持がして齒をきりきり言はせました。

「では四年生のひとはお休みの前になつたことをもう一ぺん習つてみませう。これを勘定してごらんさい。」

先生は黒板に 17×4 と書きました。

四年生は佐太郎をはじめ喜藏も甲助もみんなそれをうつしました。

「五年生の人は讀本の十頁の三課をひらいて聲をたてないで讀めるだけ讀んでごらんさい。わからない字は雜記帳へ拾つて置くのです。」五年生もみんな言はれたとほりはじめました。

「一郎さんは讀本の十八頁をしらべてやはり知らない字を書き抜いてください。」

それがすむと先生はまた教壇を下りて、一年生と二年生の習字を一人一人見てあるきました。

三郎は両手で本をちやんと机の上へもつて、言はれたところを息もつかずじつと読んでゐました。けれども雑記帳へは字を一つも書き抜いてゐませんでした。それはほんたうに知らない字が一つもないのか、たつた一本の鉛筆を佐太郎にやつてしまつたためか、どちらともわかりませんでした。

そのうち先生は教壇へ戻つて四年生の算術の計算をして見せてまた新しい問題を出す、今度は五年生の生徒の雑記帳へ書いた知らない字を黑板へ書いて、それになたとわけをつけました。そして、

「では嘉助さん、ここを讀んで。」と言ひました。

嘉助は二三度ひつかかりながら先生に教へられて讀みました。

三郎もだまつて聞いてゐました。

先生も本をとつて、じつと聞いてゐましたが、十行ばかり讀むと、

「そこまで。」と言つてこんどは先生が讀みました。

さうして一まはり済むと、先生はだんだんみんなの道具をしまはせました。

それから「ではここまで。」と言つて教壇に立ちますと一郎がうしろで、

「氣を付けい。」と言ひました。そして禮がすむと、みんな順に外へ出てこんどは外へならばすにみんな別れ別れになつて遊びました。

二時間目は一年生から六年生までみんな唱歌でした。そして先生がマンドリンを持つて出て来て、みんなはいままでに唱つたのを先生のマンドリンについて五つもうたひました。

三郎もみんな知つてゐて、みんなどんどん歌ひました。そしてこの時間は大へん早くたつてしまひました。

三時間目になるとこんどは四年生が國語で、五年生と六年生が數學でした。先生はまた黑板に問題を書いて五年生と六年生に計算させました。しばらくたつて一郎が答へを書いてしまふと、三郎の方をちよつと見ました。

すると三郎は、どこから出したか小さな消し炭で雑記帳の上へがりがりと大きく運算し

てゐたのです。

次の朝も空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。一郎は途中で嘉助と佐太郎と悦治をさそつて一緒に三郎のうちの方へ行きました。

学校の少し下流で谷川をわたつて、それから岸で楊の枝をみんな一本づつ折つて、青い皮をくるくる剥いて鞭を拵へて手でひゆうひゆう振りながら、上の野原への路をだんだんのぼつて行きました。みんなは早くも登りながら息をはあはあしました。

「又三郎ほんとにあそこの湧水まで来て待ちでるべが。」

「待ちでるんだ。又三郎嘘こがないもな。」

「ああ暑う、風吹げばいいな。」

「どごがらだが風吹いでるぞ。」

「又三郎吹がせでらべも。」

「何だがお日さんぼやつとして来たな。」

空に少しばかりの白い雲が出ました。そしてもう大分のぼつてゐました。谷底のみんなの家がすうつと下に見え、一郎のうちの木小屋の屋根が白く光つてゐます。

路が林の中に入り、しばらく路はじめじめして、あたりは見えなくなりました。そして間もなくみんなは約束の湧水の近くに來ました。するとそこから、

「おうい。みんな来たかい。」と三郎の高く叫ぶ聲がしました。

みんなはまるでせかせかと走つてのぼりました。向ふの曲り角の處に三郎が小さな唇をきつと結んだまま、三人のかけ上つて來るのを見てゐました。

三人はやつと三郎の前まで來ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も言へませんでした。嘉助などはあんまりもどかしいもんですから、空へ向いて「ホッホウ。」と叫んで早く息を吐いてしまはうとしました。すると三郎は大きな聲で笑ひました。「ずるぶん待つたぞ。それに今日は雨が降るかもしれないさうだよ。」

「そだら早く行くべささ、おらまんつ水呑んでく。」三人は汗をふいてしやがんで、まつ

白な岩からごぼごぼ噴きだす冷たい水を何べんも掬つてのみました。

「ぼくのうちはここからすぐなんだ、ちやうどあの谷の上あたりなんだ。みんなで歸りに寄らうねえ。」

「うん。まんつ野原さ行くべすさ。」

みんなが又あるきはじめたとき、湧水は何かを知らせるやうにぐうつと鳴り、そこらの樹もなんだかさあざあと鳴つたやうでした。

四人は林の裾の藪の間を行つたり岩かけの小さく崩れる所を何べんも通つたりして、もう上の野原の入口に近くなりました。

みんなはそこまで来ると来た方からまた西の方をながめました。

光つたり陰つたり幾通りにも重なつたたくさんの丘の向ふに、川に沿つたほんたうの野原がぼんやり碧くひろがつてゐるのでした。

「ありや、あいづ川だぞ。」

「春日明神さんの帯のやうだな。」三郎が言ひました。

「何のやうだと。」一郎がききました。

「春日明神さんの帯のやうだ。」

「うな神さんの帯見だごとあるが。」

「ぼく北海道で見たよ。」みんなは何のことだかわからずだまつてしまひました。

ほんたうにそこはもう上の野原の入口で、きれいに刈られた草の中に一本の巨きな栗の木が立つて、その幹は根もとの所がまつ黒に焦げて巨きな洞のやうになり、その枝には古い縄や、切れたわらぢなどがつるしてありました。

「もう少し行くけどみんなじて草刈つてるぞ。それから馬の居るどもあるぞ。」一郎は言ひながら先に立つて刈つた草のなかの一ぼんみちをぐんぐん歩きました。

三郎はその次に立つて、

「ここには熊ゐないから馬をはなして置いてもいいなあ。」と言つて歩きました。

しばらく行くとみちばたの大きな檜の木の下に、縄で編んだ袋が投げ出してあつて、澤山の草束があつちにもこつちにもころがつてゐました。

せなかに草束をしょつた二疋の馬が、一郎を見て鼻をぶるぶる鳴らしました。

「兄な、居るが。兄な、来たぞ。」一郎は汗を拭ひながら叫びました。

「おおい。おおい。其處に居る。今行くぞ。」すうつと向ふの窪みで、一郎の兄さんの聲がしました。

陽はばつと明るくなり、兄さんがそつちの草の中から笑つて出て来ました。

「善く来たな。みんなも連れで来たのが。善く来た。戻りに馬こ連でてけるな。今日あ晝まがらきつと曇る。俺も少し草集めて仕舞がらよ、うなだ遊ばばあの土手の中さ入つてろ。まだ牧馬の二十疋ばかりは居るがらな。」

兄さんは向ふへ行かうとして、振り向いて又言ひました。

「土手がら外さ出はるなよ。迷つてしまふづど危ないがらな。午まになつたら又來るがら。」

「うん。土手の中に居るがら。」

そして一郎の兄さんは行つてしまひました。

空にはうすい雲がすつかりかかり、太陽は白い鏡のやうになつて、雲と反對に馳せました。風が出て来てまだ刈つてゐない草は一面に波を立てます。一郎はさきに立つて小さな道をまつすぐに行くと、まもなくどてになりました。その土手の一とこちぎれたところに二本の丸太の棒を横にわたしてありました。悦治がそれをくぐらうとしますと、嘉助が、「おらこつたなもの外せだぞ。」と言ひながら片つ方のはじをぬいて下におろしましたのでみんなはそれをはね越えて中に入りました。

向ふの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七疋ばかり集つて、しつぽをゆるやかにばしやばしやふつてゐるのです。

「この馬みんな千圓以上するづもな。來年がらみんな競馬さも出はるのだづちやい。」一郎はそばへ行きながら言ひました。

馬はみんないまままでさびしくつて仕様なかつたといふやうに一郎たちの方へ寄つてきました。

そして鼻づらをすうつとのばして何かほしさうにするのです。

「ははあ、鹽をけるづのだな。」みんなは言ひながら手を出して馬になめさせたりしましたが、三郎だけは馬になれてゐないらしく氣味悪るさうに手をポケットへ入れてしまひました。

「わあ、又三郎馬怖^{おっか}ながるぢやい。」と悦治が言ひました。すると三郎は、

「怖くなんかないやい。」と言ひながらすぐポケットの手を馬の鼻づらへのばしましたが、馬が首をのばして舌をべろりと出すと、さつと顔いろを變へてすばやくまた手をポケットへ入れてしまひました。

「わあい、又三郎馬怖^{おっか}ながるぢやい。」悦治が又言ひました。すると三郎はすつかり顔を赤くしてしばらくもぢもぢしてゐましたが、

「そんなら、みんなで競馬^{けいば}やるか。」と言ひました。

競馬つてどうするのかとみんな思ひました。

すると三郎は、

「ぼく競馬何べんも見たぞ。けれどもこの馬みんな鞍^{くら}がないから乗れないや。みんなで一

疋づつ馬を追つて、はじめに向ふの、そら、あの巨きな樹のところに着いたものを一等にしよう。」

「そいづ面白いな。」嘉助が言ひました。

「叱^{しか}らへるぞ。牧夫に見附けらへでがら。」

「大丈夫だよ。競馬に出る馬なんか練習をしてゐないといけないんだい。」三郎がいひました。

「よしおらこの馬だぞ。」

「おらこの馬だ。」

「そんならぼくはこの馬でもいいや。」みんなは楊の枝や萱^かの穂^ほでしうとさせながら馬を軽く打ちました。

ところが馬はちつともびくともしませんでした。やはり下へ首を垂れて草をかいだり、首をのばしてそらのけしきをもつとよく見るといふやうにしてゐるのです。

一郎がそこで両手をびしやんと打ち合せて、だあ、と言ひました。

すると俄かに七疋ともまるでたてがみをそろへてかけ出したのです。

「うまあい。」嘉助ははね上つて走りました。けれどもそれはどうも競馬にはならないの
でした。

第一、馬はどこまでも顔をならべて走るのでしたし、それにそんなに競馬するくらゐ早
く走るのでもなかつたのです。それでもみんなは面白がつて、だあだと言ひながら一生け
ん命そのあとを追ひました。

馬はすこし行くと立ちどまりさうになりました。みんなもすこしはあはあしましたが、
堪へてまた馬を追ひました。するといつか馬はぐるつとさつきの小高いところをまはつ
て、さつき四人ではいつて来たどての切れた所へ来たのです。

「あ、馬出はる、馬出はる。押へる。押へる。」一郎はまつ青になつて叫びました。じつ
さい馬はどての外へ出たのらしいのでした。どンドン走つて、もうさつきの丸太の棒を越
えさうになりました。

一郎はまるであわてて、

「どう、どう、どう、どう、」と言ひながら一生けん命走つて行つて、やつとそこへ着い
てまるでころぶやうにしながら手をひろげたときは、そのときはもう二疋は柵の外へ出て
ゐたのです。

「早く来て押へろ。早く来て。」一郎は息も切れるやうに叫びながら丸太棒をもとのやう
にしました。

三人は走つて行つて急いで丸太をくぐつて外へ出ますと二疋の馬はもう走るでもなく、
どての外に立つて草を口で引つばつて抜くやうにしてゐます。

「そろそろ押へろよ。そろそろど。」と言ひながら一郎は一びきのくつわについた札の
ところをしつかり押へました。嘉助と三郎がもう一疋を押へようとそばへ寄りますと、馬
はまるで愕いたやうにどてへ沿つて一目散に南の方へ走つてしまひました。

「兄な馬あ逃げる、馬は逃げる。兄な、馬逃げる。」と、うしろで一郎が一生けん命叫ん
でゐます。三郎と嘉助は一生けん命馬を追ひました。

ところが馬はもう今度こそほんたうに遁げるつもりらしかつたのです。まるで一丈ぐら

みある草をわけて高みになつたり低くなつたり、どこまでも走りまわりました。

嘉助はもう足がしびれてしまつて、どこをどう走つてゐるのかわからなくなりました。それからまはりがまつ蒼になつて、ぐるぐる廻り、とうとう深い草の中に倒れてしまいました。馬の赤いたてがみと、あとを追つて行く三郎の白いシャツポが終りにちらつと見えませんでした。

嘉助は、仰向けになつて空を見ました。空がまつ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走つてゐます。そしてカンカン鳴つてゐます。

嘉助はやつと起き上つて、せかせか息しながら馬の行つた方へ歩き出しました。草の中には、今馬と三郎が通つた痕らしく、かすかな路のやうなものがありました。嘉助は笑ひました。そして、(ふん、なかに馬何處かでこわくなつてのつそり立つてるさ。)と思ひました。

そこで嘉助は、一生けん命その痕をつけて行きました。

ところがその跡のやうなものは、まだ百歩も行かないうちに、をとこへしや、すてきに

背の高い薊あざみの中で、二つにも三つにも分れてしまつて、どれがどれやら一向わからなくなつてしまひました。

嘉助は「おうい。」と叫びました。

「おう。」とどこかで三郎が叫んでゐるやうです。思ひ切つて、そのまん中を進みました。けれどもそれも、時々断れたり、馬の歩かないやうな急な所を横に過ぎたりするのでした。

空はたいへん暗く重くなり、まはりがぼうつと霞んで來ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が切れ切れになつて眼の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

(ああ、こいつは悪くなつて來た。みんな悪いことはこれから集つてやつて來るのだ。)と嘉助は思ひました。全くその通り、俄に馬の通つた痕は草の中でなくなつてしまひました。

(ああ悪くなつた、悪くなつた。) 嘉助は胸をときどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ言つたり、さらさら鳴つたりしました。霧が殊に滋しげくな

つて、着物はすつかりしめつてしまひました。

嘉助は咽喉一杯叫びました。

「一郎、一郎、こつちさ來う。」ところが何の返事も聞えませんが、黑板から降る白墨の粉のやうな、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまはり、あたりが俄かにシインとして、陰氣に陰氣になりました。草からは、もう雫の音がポタリポタリと聞えて來ます。

嘉助は、もう早く一郎たちの所へ戻らうとして急いで引つ返しました。けれどもどうも、それは前に來た所とは違つてゐたやうでした。第一、薊があまり澤山ありましたし、それに草の底にさつき無かつた岩かけが、度度ころがつてゐました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現はれました。すすきがざわざわつと鳴り、向ふの方は底知れずの谷のやうに、霧の中に消えてゐるではありませんか。

風が來ると、芒の穂は細い澤山の手をいばいのばして、忙しく振つて、

「あ、西さん。あ、東さん。あ、西さん。あ、南さん。あ、西さん。」なんて言つてゐる様でした、嘉助はあんまり見つともなかつたので、目を瞑つて横を向きました。そして急

いで引つ返しました。小さな黒い道がいきなり草の中に出て來ました。それは澤山の馬の蹄の痕で出來上つてゐたのです。嘉助は夢中で短い笑ひ聲をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸ぐらゐになつたり、又三尺ぐらゐに變つたり、おまけに何だかぐるつと廻つてゐるやうに思はれました。そして、とうとう大ききなてつぺんの焼けた栗の木の前まで來た時、ぼんやり幾つにも岐れてしまひました。

其處は多分は、野馬の集まり場所であつたのでせう。霧の中に圓い廣場のやうに見えたのです。

嘉助はがつかりして、黒い道を又戻りはじめました、知らない草穂が靜かにゆらぎ、少し強い風が來る時は、どこかで何か合圖をしてでも居るやうに、一面の草が、それ來たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光つてキーンキーンと鳴つてゐます。

それからすぐ眼の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらはれました。嘉助はし

ばらく自分の眼を疑つて立ちどまつてゐましたが、やはりどうしても家らしかつたので、こはこはもつと近寄つて見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるつと白く搖らぎ、草がバラツと一度に雫を拂ひました。

(間違つて原の向ふ側へ下りれば、又三郎もおれも、もう死ぬばかりだ。) と嘉助は半分思ふやうに半分つぶやくやうにしました。それから叫びました。

「一郎、一郎、居るが。一郎。」

又明るくなりました。草がみな一齊に悦びの息をします。

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足結へられてたふだ。」といつか誰かの話した語が、はつきり耳に聞えて來ます。

そして、黒い路が俄かに消えてしまひました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて來ました。

空が旗のやうにばたばた光つて翻へり、火花がパチパチッと燃えました。嘉助はとうとう草の中に倒れてねむつてしまひました。

そんなことはみんなどこかの遠いできごとのやうでした。

もう又三郎がすぐ眼の前に坐つて足を投げだして、だまつて空を見あげてゐるのです。

いつもの鼠いろの上着の上にガラスのマントを着てゐるのです。それから光るガラスの靴をはいてゐるのです。

又三郎の肩には栗の木の影が青く落ちてゐます。又三郎の影は、また青く草に落ちてゐます。そして風がどんだん吹いてゐるのです。

又三郎は笑ひもしなければ物も言ひません。ただ小さな唇を強さうにきつと結んだまま黙つてそらを見てゐます。いきなり又三郎はひらつとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがキラキラ光りました。

*

ふと嘉助は眼をひらきました。灰いろの霧が速く速く飛んでゐます。

そして馬がすぐ眼の前にのつそりと立つてゐたのです。その眼は嘉助を怖れて横の方を

向いてゐました。

嘉助ははね上つて馬の名札を押へました。そのうしろから三郎がまるで色のなくなつた唇をきつと結んでこつちへ出てきました。

嘉助はぶるぶるふるへました。

「おうい。」霧の中から一郎の兄さんの聲がしました。雷もごろごろ鳴つてゐます。

「おおい、嘉助。居るが。嘉助。」一郎の聲もしました。嘉助はよろこんでとびあがりました。

「おおい。居る。居る。一郎。おおい。」

一郎の兄さんと一郎が、とつぜん眼の前に立ちました。嘉助は俄かに泣き出しました。

「危ながつたぞ。すつかりぬれだな。どう。」一郎の兄さんはなれた手つきで馬の首を抱いて、もつてきたくつわをすばやく馬のくちにはめました。

「さあ、あべさ。」

「又三郎びつくりしたべあ。」一郎が三郎に言ひました。三郎がだまつて、やつぱりきつ

と口を結んでうなづきました。

みんなは一郎の兄さんについて、緩い傾斜を二つ程昇り降りしました。それから、黒い大きな路について、暫く歩きました。

雷光が二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼く匂がして、霧の中を煙がぼろりと流れてゐます。

一郎の兄さんが叫びました。

「おぢいさん。居だ、居だ。みんな居だ。」

おぢいさんは霧の中に立つてゐて、

「ああ心配した、心配した。ああ好がつた。おお嘉助。寒がべあ、さあ入れ。」と言ひました。嘉助は一郎と同じやうにやはりこのおぢいさんの孫のやうでした。

半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草で作つた小さな圍ひがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えてゐました。

一郎の兄さんは馬を櫓の木につなぎました。

馬もひひんと鳴いてゐます。

「おおむぞやな。⁽¹⁾な。何ぼが泣いたがな。そのわろは金山掘りのわろだな。さあさあ、みんな團子たべろ。食べろ。な、今こつちを焼ぐがらな。全體何處迄行つてだつた。」

「笹長根の下り口だ。」と一郎の兄さんが答へました。

「危い^{あやな}がつた。危い^{あやな}がつた。向ふさ降りだら馬も人もそれつ切りだつたぞ。さあ嘉助、團子たべろ。このわろもたべろ。さあさあ、こいづもたべろ。」

「おぢいさん。馬置いてくるが。」と一郎の兄さんが言ひました。

「うんうん。牧夫來るとまだやがましいからな、したどもああ心配した。俺も虎こ山の下まで行つて見で來た。はあ、まんつ好がつた。雨も霽れる。」

「今朝ほんとに天氣好がつたのにな。」

「うん。又好くなるさ、あ、雨漏つて來たな。」

一郎の兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサいひます。おぢいさんが笑ひながらそれを見上げました。

兄さんが又はいつて來ました。

「おぢいさん。明るくなつた。雨あ霽れだ。」

「うんうん、さうが。さあみんなよつく火にあだれ、おら又草刈るがらな。」

霧がふつと切れました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄つてかかり、幾片かの蠟のやうな霧が、逃げおくれして仕方なしに光りました。

草からは雫がきらきら落ち、總ての葉も莖も花も、今年の終りの陽の光を吸つてゐます。はるかな西の碧い野原は、今泣きやんだやうにまぶしく笑ひ、向ふの栗の木は青い後光を放ちました。

みんなはもう疲れて一郎をさきに野原をおりました。湧水のところで三郎はやつぱりだまつて、きつと口を結んだままみんなに別れて、じぶんだけお父さんの小屋の方へ歸つて行きました。

歸りながら嘉助が言ひました。

「あいづやつぱり風の神だぞ。風の神の子つ子だぞ。あそごさ二人して巢食つてるんだ

ぞ。」

「そでないよ。」一郎が高く言ひました。

次の日は朝のうちは雨でしたが、二時間目からだんだん明るくなつて三時間目の終りの十分休みにはとうとうすつかりやみ、あちこちに削つたやうな青ぞらもできて、その下をまつ白な鱗雲がどンドン東へ走り、山の萱からも栗の木からも残りの雲が湯氣のやうに立ちました。

「下つたら葡萄蔓とりに行かないが。」耕助が嘉助にそつと言ひました。

「行く行く。又三郎も行かないが。」嘉助がさそひました。耕助は、

「わあい、あそご又三郎さ教へるやないぢや。」と言ひましたが、三郎は知らないで、

「行くよ。ぼくは北海道でもとつたぞ。ぼくのお母さんは樽へ二つ漬けたよ。」
と言ひました。

「葡萄とりにおらも連でがないが。」二年生の承吉も言ひました。

「わがないぢや。うなどさ教へるやないぢや。おら去年な新しいどご見附だぢや。」

みんなは學校の濟むのが待ち遠しかつたのでした。五時間目が終ると、一郎と嘉助が佐太郎と耕助と悦治と三郎と六人で學校から上流の方へ登つて行きました。少し行くと一けんの藁やねの家があつて、その前に小さなたばこ畑がありました。たばこの木はもう下方の葉をつんであるので、その青い莖が林のやうにきれいならんでいかにも面白さうでした。

すると三郎はいきなり、

「何だい、此の葉は。」と言ひながら葉を一枚むしつて一郎に見せました。すると一郎はびつくりして、

「わあ、又三郎、たばこの葉とるづど専賣局にうんと叱られるぞ。わあ、又三郎何してとつた。」と少し顔いろを悪くして言ひました。みんなも口口に言ひました。

「わあい。専賣局であ、この葉一枚づつ數へで帳面さつけでるだ。おら知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」みんな口をそろへてはやしました。

すると三郎は顔をまつ赤にして、しばらくそれを振り廻はして何か言はうと考へてゐましたが、

「おら知らないでとつたんだい。」と怒つたやうに言ひました。

みんなは怖なさうに、誰か見てゐないかといふやうに向ふの家を見ました。たばこぼたけからもうもうとあがる湯氣の向ふで、その家はしいんとして誰も居たやうではありませんでした。

「あの家一年生の小助の家ぢやい。」嘉助が少しなだめるやうに言ひました。ところが耕助ははじめからじぶんの見附けた葡萄藪へ、三郎だのみんなあんまり来て面白くなかつたもんですから、意地悪くもいちど三郎に言ひました。

「わあ、又三郎なんぼ知らないたつてわがないんだぢや。わあい、又三郎もどの通りにしてまゆんだあ。」

三郎は困つたやうにしてまたしばらくだまつてゐましたが、

「そんなら、おいら此處へ置いてくからいいや。」と言ひながらさつきの木の間もとへそつとその葉を置きました。すると一郎は、

「早くあべ。」と言つて先にたつてあるきだしましたのでみんなもついて行きましたが、耕助だけはまだ残つて、「ほう、おら知らないぞ。ありや、又三郎の置いた葉、あすごにあるぢやい。」なんて言つてゐるのでしたがみんながどんどん歩きだしたので耕助もやつとついて來ました。

みんなは萱の間の小さなみちを山の方へ少しのぼりますと、その南側に向いた窪みに栗の木があちこち立つて、下には葡萄がもくもくした大きな藪になつてゐました。

「ここおれ見附だのだからみんなあんまりとるやないぞ。」耕助が言ひました。

すると三郎は、

「おいら栗の方をとるんだい。」と言つて石を拾つて一つの枝へ投げました。青いいがが一つ落ちました。

三郎はそれを棒き棒で剝いて、まだ白い栗を二つとりました。みんなは葡萄の方へ一生けん命でした。

そのうち耕助が一つの藪へ行かうと一本の栗の木の下を通りますと、いきなり上から雫が一ぺんにざつと落ちてきましたので、耕助は肩から、せなかから、水へ入つたやうになりました。耕助は愕いて口をあいて上を見ましたら、いつか木の上に三郎がのぼつてゐて、なんだか少しわらひながらじぶんも袖ぐちで顔をふいてゐたのです。

「わあい、又三郎何する。」 耕助はうらめしさうに木を見あげました。

「風が吹いたんだい。」 三郎は上でくつくつわらひながら言ひました。

耕助は樹の下をはなれてまた別の藪で葡萄をとりはじめました。もう耕助はじぶんでも持てないくらいあちこちへためてゐて、口も紫いろになつてまるで大きく見えました。

「さあ、この位持つて戻らないが。」 一郎が言ひました。

「おら、もつと取つてぐぢや。」 耕助が言ひました。

そのとき耕助はまた頭からつめたい雫をさあつとかぶりました。耕助はまたびつくりし

たやうに木を見上げましたが今度は三郎は樹の上には居ませんでした。

けれども樹の向ふ側に三郎の鼠いろのひぢも見えてゐましたし、くつくつ笑ふ聲もしましたから、耕助はもうすつかり怒つてしまひました。

「わあい又三郎、まだひとさ水掛けだな。」

「風が吹いたんだい。」

みんなはどつと笑ひました。

「わあい又三郎、うなそこで木ゆすつたけあなあ。」

みんなはどつとまた笑ひました。

すると耕助は、うらめしさにはばらくだまつて三郎の顔を見ながら、

「うあい又三郎、汝などあ世界になくてもいいなあ。」

すると三郎はするさうに笑ひました。

「やあ耕助君、失敬したねえ。」

耕助は何かもつと別のことを言はうと思ひましたが、あんまり怒つてしまつて考へ出す

ことが出来ませんでしたので又同じやうに叫びました。

「うあい、うあいだ、又三郎、うなみだいな風など世界中になくてもいいなあ、うわあい。」
「失敬したよ、だつてあんまりきみもぼくへ意地悪をするものだから。」

三郎は少し眼をパチパチさせて氣の毒さうに言ひました。けれども耕助のいかりは仲仲解けませんでした。そして三度同じことをくりかへしたのです。

「うわい又三郎、風などあ世界中に無くてもいな、うわい。」

すると三郎は少し面白くなつたやうでまたくつくつ笑ひだしてたづねました。

「世界中に無くつてもいいつてどう言ふんだい。いいと箇條をたてていつてごらん。それから。」三郎は先生みたいな顔つきをして指を一本だしました。

耕助は試験のやうだしつまらないことになつたと思つて大へん口惜しかつたのですが、仕方なくしばらく考へてから言ひました。

「汝など悪戯ばりさな、傘ぶつ壊したり。」

「それから、それから。」三郎は面白さうに一足進んで言ひました。

「それから樹折つたり轉覆したりさな。」

「それから、それからどうだい。」

「家もぶつ壊さな。」

「それから、それから、あとはどうだい。」

「あかしも消さな。」

「それからあとは？ それからあとは？ どうだい。」

「シャツポもとばさな。」

「それから？ それからあとは？ それからどうだい。」

「笠もとばさな。」

「それから、それから。」

「それから、ラ、ラ、電信ばしらも倒さな。」

「それから？ それから？ それから？」

「それから屋根もとばさな。」

「アアハハ屋根は家のうちだい。どうだいまだあるかい。それから、それから？」

「それだから、ラ、ラ、それだからランプも消さな。」

「アハハハ、ランプはあかしのうちだい。けれどそれだけかい。え、おい。それから？
それから、それから。」

耕助はつまつてしまいました。大抵もう言つてしまつたのですからいくら考へてももう
出来ませんでした。

三郎はいよいよ面白さうに指を一本立てながら、

「それから？ それから？ ええ？ それから？」と言ふのでした。

耕助は顔を赤くしてしばらく考へてからやつと答へました。

「風車もぶつ壊さな。」

すると三郎はこんどこそはまるで跳び上つて笑つてしまいました。みんなも笑ひまし
た。笑つて笑つて笑ひました。

三郎はやつと笑ふのをやめて言ひました。

「そらごらん、とうとう風車などを言つちやつたらう。風車なら風を悪く思つちやゐない
んだよ。勿論時時はすこともあるけれども廻してやる時の方がずっと多いんだ。風車な
らちつとも風を悪く思つてゐないんだ。」

三郎は又涙の出るほど笑ひました。

耕助もさつきからあんまり困つたために怒つてゐたのもだんだん忘れて來ました。そし
てつい三郎と一しよに笑ひ出してしまつたのです。すると三郎もすつかりきげんを直して、
「耕助君、いたづらをして濟まなかつたよ。」と言ひました。

「さあそれで行ぐべな。」と一郎は言ひながら三郎にぶだうを五ふさばかりくれました。

三郎は白い栗をみんなに二つづつ分けました。そしてみんなは下のみちまでいつしよに
下りて、あとはめいめいのうちへ歸つたのです。

次の朝は霧がはじめ降つて學校のうしろの山もぼんやりしか見えませんでした。とこ
ろが今日も二時間目ころからだんだん霽れて間もなく空はまつ青になり、日はかんかん照

つて、お午ひるになつて一、二年が下つてしまふとまるで夏のやうに暑くなつてしまひました。

ひるすぎは先生もたびたび教壇で汗を拭ぬぐき、四年生の習字も五年生六年生の圖書もまるでむし暑くて、書きながらうとうと、するのです。

授業が済むとみんなはすぐ川下の方へそろつて出掛けました。嘉助が、

「又三郎、水泳ぎに行がないが。小さいやづど今ころみんな行つてるぞ。」と言ひましたので三郎もついて行きました。

そこはこの前、上の野原へ行つたところよりも少し下流で、右の方からも一つの谷川がはいつて来て、少し廣い河原になりそのすぐ下流は巨きなさいかちの樹の生えた崖がけになつてゐるのでした。

「おおい。」とさきに來てゐることもらがあだかであらで両手をあげて叫びました。一郎やみんなは、河原のねむの木の間をまるで徒競争ヒキヤウのやうに走つて、いきなりきものをぬぐとすぐどぶんどぶんと水に跳とび込んで兩足をかはるがはる曲まげて、だあんだあんと水をたたたくや

うにしながら斜なめにならんで向ふ岸へ泳ぎはじめました。前に居たこともらもあとから追ひ附いて泳ぎはじめました。

三郎もきものをぬいでみんなのあとから泳ぎはじめましたが、途中で聲をあげてわらひました。

すると向ふ岸についた一郎が、髪をあざらしのやうにして、唇を紫にしてわくわくふるへながら、

「わあ又三郎、何してわらつた。」と言ひました。

三郎はやつぱりふるへながら水からあがつて、

「この川冷たいなあ。」と言ひました。

「又三郎何してわらつた？」一郎はまた訊ききました。

三郎は、

「おまへたちの泳ぎ方はをかしいや。なぜ足をだぶだぶ鳴らすんだい。」と言ひながらまた笑ひました。

「うわあい。」と一郎は言ひましたが、何だかきまりが悪くなつたやうに、

「石取りさないが。」と言ひながら白い圓い石をひろひました。

「する、する。」こどもらがみんな叫びました。

「おれそれであ、あの木の上から落すがらな。」と一郎は言ひながら崖の中ごろから出てゐるさいかちの木へすると昇つて行きました。そして、

「さあ落すぞ。一二三。」と言ひながらその白い石をどぶん、と淵へ落しました。

みんなはわれ勝に岸からまつさかさまに水にとび込んで青白いらつこのやうな形をして底へ潜つて、その石をとらうとしました。

けれどもみんな底まで行かないうちに息がつまつて浮びだして来て、かはるがはるふうとそこらへ霧をふきました。

三郎はじつとみんなのするのを見てゐましたが、みんなが浮んできてからじぶんもどぶんとはいつて行きました。けれどもやつぱり底まで届かずに浮いてきたのでみんなはどつと笑ひました。そのとき向ふの河原のねむの木のところを大人が四人、肌ぬぎになつたり、

網をもつたりしてこつちへ來るのでした。

すると一郎は木の上でまるで聲をひくくしてみんなに叫びました。

「おお、發破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめで早くみんな下流ささがれ。」そこでみんなは、なるべくそつちを見ないふりをしながら、いつしよに砥石をひろつたり、鶴を追つたりして、發破のことなど、すこしも氣がつかないふりをしてゐました。

すると向ふの淵の岸では、下流の坑夫をしてゐた庄助が、しばらくあちこち見まはしてから、いきなりあぐらをかいて砂利の上へ坐つてしまひました。それからゆつくり腰からたばこ入れをとつて、きせるをくはいてばくばく煙をふきだしました。奇體だと思つてゐましたら、また腹がけから何か出しました。

「發破だぞ、發破だぞ。」とみんな叫びました。

一郎は手をふつてそれをとめました。庄助は、きせるの火をしづかにそれへうつしました。うしろに居た一人はすぐ水に入つて網をかまへました。庄助はまるで落ちついて、立つて一あし水に入るとすぐその持つたものを、さいかちの木の下のところへ投げこみまし

た。するとまもなく、ぼおといふやうなひどい音がして水はむくつと盛りあがり、それからしばらくそこらあたりがきいんと鳴りました。

向ふの大人たちはみんな水へ入りました。

「さあ、流れて来るぞ、みんなとれ。」と一郎が言ひました。まもなく耕助は小指ぐらゐの茶いろなかじかが横向きになつて流れて来たのをつかみましたし、そのうしろでは嘉助がまるで瓜をすするときのやうな聲を出しました。それは六寸ぐらゐある鮎をとつて、顔をまつ赤にしてよろこんでゐたのです。それからみんなとつて、わあわあよろこびました。「だまつてろ、だまつてろ。」一郎が言ひました。

そのとき向ふの白い河原を肌ぬぎになつたり、シャツだけ着たりした大人が五、六人かけて来ました。そのうしろからはちやうど活動寫眞のやうに一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗つてまつしぐらに走つて来ました。みんな發破の音を聞いて見に来たのです。庄助はしばらく腕を組んでみんなのとるのを見てゐましたが、

「さつぱり居ないな。」と言ひました。すると三郎がいつの間にか庄助のそばへ行つてゐ

ました。そして中位の鮎を二疋、

「魚返すよ。」といつて河原へ投げるやうに置きました。すると庄助が、

「何だいこの童あ、きたいなやづだな。」と言ひながらじろじろ三郎を見ました。

三郎はだまつてこつちへ歸つてきました。

庄助は變な顔をしてみてゐます。みんなはどつとわらひました。

庄助はだまつて上流へ歩きだし、ほかのおとなたちもついて行きました。網シャツの人は馬に乗つて、またかけて行きました。耕助が泳いで行つて三郎の置いて来た魚を持つてきました。みんなはそこでまたわらひました。

「發破かけたら、雜魚撒かせ。」嘉助が河原の砂つばの上で、びよんびよんはねながら高く叫びました。

みんなはとつた魚を石で圍んで、小さな生洲をこしらへて、生きかへつてももう遁げて行かないやうにして、また上流のさいかちの木へのぼりはじめました。

ほんたうに暑くなつて、ねむの木もまるで魚のやうにぐつたり見えまじし、空もまる

で底なしの淵のやうになりました。

そのころ誰かが、

「あ、生洲、打壊すとこだぞ。」と叫びました。見ると一人の變に鼻の尖つた、洋服を着てわらぢをはいた人が、手にはステッキみたいなものをもつて、みんなの魚をぐちやぐちや掻きまはしてゐるのです。

その男はこつちへびちやびちや岸をあるいて來ました。

「あ、あいづ專賣局だぞ。專賣局だぞ。」佐太郎が言ひました。

「又三郎、うなのとつた煙草の葉めつたんだで、うな、連れでぐさ來たのだ。」嘉助が言ひました。

「何だい。こはくないや。」三郎はきつと口をかねで言ひました。

「みんな又三郎のごと圍んでろ、圍んでろ。」と一郎が言ひました。

そこでみんなは三郎をさいかちの木のいちばん中の枝に置いて、まはりの枝にすつかり腰かけました。

「來た來た、來た來た、來たつ。」とみんなは息をこらしました。

ところがその男は別に三郎をつかまへる風でもなく、みんなの前を通りこして、それから淵のすぐ上流の淺瀬をそつちへ渡らうとしました。それもすぐに河をわたるでもなく、いかにもわらぢや脚絆の汚くなつたのをそのまま洗ふといふふうに、もう何べんも行つたり來たりするもんですから、みんなはだんだん怖くなくなりましたが、その代り氣持が惡くなつてきました。

そこでとうとう一郎が言ひました。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから一二三で叫ぶこだ。いいか。

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生言ふでないか。一、二、三、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生言ふでないか。」

その人はびつくりしてこつちを見ましたけれども、何を言つたのかよくわからないとい

ふやうすでした。そこでみんなはまた言ひました。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、言ふでないか。」

鼻の尖つた人はすばすばと、煙草を吸ふときのやうな口つきで言ひました。

「この水のむのか、こちらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、いつでも先生言ふでないか。」

鼻の尖つた人は少し困つたやうにして、また言ひました。

「川をあるいてゐるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生言ふでないか。」

その人は、あわてたのをごまかすやうに、わざとゆつくり川をわたつて、それからアルプスの探險みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をななめにのぼつて、崖の上のたばこ畠へはいつてしまひました。

すると三郎は、

「何だい、ぼくを連れにきたんぢやないや。」と言ひながらまつさきにとぶんと淵へとび込みました。

みんなも何だか、その男にも三郎にも氣の毒なやうなをかした、がらんとした氣持ちになりながら、一人づつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり手にもつたりして家に歸りました。

次の朝、授業の前みんなが運動場で鐵棒にぶら下つたり、棒かくしをしたりしてゐますと、少し遅れて佐太郎が何か入れた箆をそつと抱へてやつて來ました。

「何だ何だ。何だ。」とすぐみんな走つて行つてのぞき込みました。

すると佐太郎は袖でそれをかくすやうにして、急いで學校の裏の岩穴のところへ行きました。みんなはいよいよあとを追つて行きました。

一郎がそれをのぞくと、思はず顔いろを變へました。

それは魚の毒もみにつかふ山椒の粉で、それを使ふと發破と同じやうに巡查に押へられるのでした。ところが佐太郎はそれを岩穴の横の萱の中へかくして、知らない顔をして運動場へ歸りました。

そこでみんなはひそひそと、時間になるまでいつまでもその話ばかりしてゐました。その日も十時ごろからやつぱり昨日のやうに暑くなりました。みんなはもう授業の済むのばかり待つてゐました。

二時になつて五時間目が終ると、もうみんな一目散に町の祭りのときの瓦斯のやうな匂のむつとするねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に着きました。すつかり夏のやうな、立派な雲の峰が東でむくむく盛りあがり、さいかちの木は青く光つて見えました。

みんな急いで着物をぬいで淵の岸に立つと、佐太郎が一郎の顔を見ながら言ひました。「ちやんと一列にならべ、いいか、魚浮いて來たら泳いで行つてとれ。とつた位與るぞ。SSか。」

小さなこどもらはよろこんで、顔を赤くして、押しあつたりしながらぞろつと淵を圍み

ました。

ペ吉だの三四人はもう泳いで、さいかちの木の下まで行つてゐました。

佐太郎が大威張りで、上流の瀬に行つて箆をぢやぶぢやぶ水で洗ひました。

みんなしいんとして水を見つめて立つてゐました。

三郎は水を見ないで向ふの雲の峰の上を通る黒い鳥を見てゐました。一郎も河原に石をこちこち叩いてゐました。

ところが、それからよほどたつても魚は浮いて來ませんでした。

佐太郎は大へんまじめな顔で、きちんと立つて水を見てゐました。昨日發破をかけたときなら、もう十匹もとつてゐたんだとみんなは思ひました。またずるぶんしばらくみんなしいんとして待ちました。けれどもやつぱり魚は一びきも浮いて來ませんでした。

「さつぱり魚、浮かばないな。」耕助が叫びました。佐太郎はびくつとしましたけれども、まだ一心に水を見てゐました。

「魚さつぱり浮かばないな。」ペ吉がまた向ふの木の下で言ひました。するともう、みんな

なはがやがやと言ひ出して、みんな水にとび込んでしまひました。

佐太郎はしばらくきまり悪さうに、しやがんで水を見てゐましたけれど、とうとう立つて、

「鬼つこしないか。」と言ひました。

「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出しました。泳いでゐたものは急いでせいの立つところまで行つて手を出しました。

一郎も河原から来て手を出しました。そして一郎ははじめに、昨日あの變な鼻の尖つた人の登つて行つた崖の下の、青いぬるぬるした粘土のところを根つこにきめました。そこに取りついてゐれば、鬼は押へることができないといふのでした。それから、はさみ無しの一人まけかちでじゃんけんをしました。

ところが悦治はひとり、はさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になりました。悦治は、唇を紫いろにして河原を走つて、喜作を押へたので鬼は二人になりました。それからみんなは、砂つばの上や淵を、あつちへ行つたりこつちへ來たり、押へたり

押へられたり、何べんも鬼つこをしました。

しまひにとうとう三郎一人が鬼になりました。三郎はまもなく吉郎をつかまへました。みんなはさいかちの木の下に居てそれを見てゐました。すると三郎が、

「吉郎君、きみは上流から追つて來るんだよ。いいか。」と言ひながら、じぶんはだまつて立つて見てゐました。

吉郎は口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追つて來ました。

みんなは淵へ跳び込む支度をしました。一郎は楊の木にのぼりました。そのとき吉郎が、あの上流の粘土が足についてゐたために、みんなの前ですべつてころんでしまひました。

みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入つたりして、上流の青い粘土の根に上つてしまひました。

「又三郎、來。」嘉助は立つて口を大きくあいて、手をひろげて三郎をばかにしました。すると三郎はさつきからよつぽど怒つてゐたと見えて、

「ようし、見てゐるよ。」と言ひながら本氣になつて、さぶんと水に跳び込んで、一生け

ん命、そつちの方へ泳いで行きました。

三郎の髪の毛が赤くて、ばしやばしやしてゐるのに、あんまり永く水につかつて唇もすこし紫いろなので、子どもらはすつかり恐がつてしまひました。

第一、その粘土のところはせまくて、みんながはいれなかつたのに、それに大へんつるつるすべる坂になつてゐましたから、下の方の四五人などは上の人につかまるやうにして、やつと川へすべり落ちるのをふせいでゐたのでした。一郎だけが、いちばん上で落ちついで、さあみんな、とか何とか相談らしいことをはじめました。みんなもそこで頭をあつめて聞いてゐます。三郎はぼちやぼちや、もう近くまで行きました。

みんなはひそひそはなしてゐます。すると三郎は、いきなり両手でみんなへ水をかけ出しました。みんなが、ばたばた防いでゐましたら、だんだん粘土がすべつて来て、なんだかすこうし下へずれたやうになりました。

三郎はよろこんで、いよいよ水をはねとばしました。

すると、みんなはぼちやんぼちやんと一度にすべつて落ちました。三郎はそれを片つば

しからつかまへました。一郎もつかまりました。嘉助がひとり、上をまはつて泳いで遁げましたら、三郎はすぐに追ひ附いて押へたほかに、腕をつかんで四五へんぐるぐる引つぱりまはしました。嘉助は水をのんだと見えて、霧をふいて、ごぼごぼむせて、「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と言ひました。小さな子どもらはみんな砂利に上つてしまひました。

三郎はひとりさいかちの木の下に立ちました。

ところが、そのときはもう、そらがいつばいの黒雲で、楊も變に白つぼくなり、山の草はしんしんとくらくなり、そらは何とも言はれない恐ろしい景色にかはつてゐました。

そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴り出しました。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやつて來ました。風までひゆうひゆう吹きだしました。

淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなつてしまひました。

青いくるみも吹きとばせ

すつばいくわりんも吹きとばせ

どつどつ どつどつどつ どつどつどつ

どつどつどつどつどつどつどつどつ

先頃、どこかで聞いたばかりのあの歌を一郎は夢の中で又きいたのです。

びつくりして跳ね起きて見ると、外ではほんたうにひどく風が吹いて、林はまるで咆えるやう、あけがた近く青ぐるいろすあかりが、障子や棚の上の提灯箱や、家中いつばいでした。一郎はすばやく帯をして、そして下駄をはいて土間を下り、馬屋の前を通つて潜りをあけましたら、風がつめたい雨の粒と一緒にどうと入つて來ました。

馬屋のうしろの方で何か戸がばたつと倒れ、馬はぶるるつと、鼻を鳴らしました。

一郎は風が胸の底まで滲み込んだやうに思つて、はあと強く息を吐きました。そして外へかけだしました。

外はもうよほど明るく、土はぬれて居りました。家の前の栗の木の列は變に青く白く見

えて、それがまるで風と雨とで今洗濯をするともいふやうに烈しくもまれてゐました。

青い葉も幾枚も吹き飛ばされ、ちぎられた青い栗のいがは黒い地面にたくさん落ちてゐました。空では雲がけはしい灰いろに光り、どんだんだん北の方へ吹きとばされてゐました。

遠くの方の林はまるで海が荒れてゐるやうに、ごんごんと鳴つたりざつと聞えたりするのでした。一郎は顔いつばいに冷たい雨の粒を投げつけられ、風に着物をもつて行かれさうになりながら、だまつてその音をききすまし、じつと空を見上げました。

すると胸がさらさらと波をたてるやうに思ひました。けれども又じつとその鳴つて、吠えて、うなつてかけて行く風を見てゐますと、今度は胸がどかどかなつてくるのでした。

昨日まで丘や野原の空の底に澄みきつてしんとしてゐた風が、今朝夜あけ方、俄かに一齊に斯う動き出して、どんだんだんタスカロラ海溝の北のはしをめぐって行くことを考へますと、もう一郎は顔がほてり、息もはあはあとなつて、自分まで一緒に空を翔けて行くやうな氣持ちになつて、大急ぎでうちの中へはいると胸を一ぱいはつて、息をふつ

と吹きました。

「ああひで風だ。今日は煙草も栗もすつかりやらへる。」と一郎のおぢいさんが潜りのところに立つて、じつと空を見てゐます。一郎は急いで井戸からバケツに水を一ぱい汲んで臺所をぐんぐん拭きました。

それから金だらひを出して顔をぶるぶる洗ふと、戸棚から冷たいごはんと味噌をだして、まるで夢中でざくざく食べました。

「一郎、いまお汁できるから少し待つてろよ。何して今朝そつたに早く學校へ行かないやないがべ。」お母さんは馬にやるまめを煮るかまどに木を入れながらききました。

「うん。又三郎は飛んでつたかも知れないもや。」

「又三郎つて何だてや。鳥こだてが。」

「うん。又三郎つていふやづよ。」一郎は急いでごはんをしまふと、椀をこちこち洗つて、それから臺所の釘にかけてある油合羽を着て、下駄はもつて、はだして嘉助をさそひに行きました。

嘉助はまだ起きたばかりで、

「いまだごはんをたべて行くがら。」と言ひましたので、一郎はしばらくうまやの前で待つてゐました。

まもなく嘉助は小さい簑を着て出て來ました。

烈しい風と雨にぐしよぬれになりながら二人はやつと學校へ來ました。昇降口からはいつて行きますと教室はまだしいんとしてゐましたが、ところどころの窓のすきまから雨がはいつて床板はまるでざぶざぶしてゐました。一郎はしばらく教室を見まはしてから、

「嘉助、二人して水掃ぐべな。」と言つてしゆる箒をもつて來て水を窓の下の孔へはき寄せてゐました。

するともう誰か來たのかといふやうに奥から先生が出てきましたが、ふしぎなことは先生があたり前の單衣をきて赤いうちわをもつてゐるのです。

「たいへん早いですね。あなたと二人で教室の掃除をしてゐるのですか。」先生がききました。

「先生お早うございます。」 一郎が言ひました。

「先生、お早うございます。」 嘉助も言ひましたがすぐ、

「先生、又三郎今日来るのすか。」 とききました。

先生はちよつと考へて、

「又三郎つて高田さんですか。ええ、高田さんは昨日お父さんといつしよにもう外へ行き
ました。日曜なのでみなさんにご挨拶するひまがなかつたのです。」

「先生飛んで行つたのすか。」 嘉助がききました。

「いいえ、お父さんが會社から電報で呼ばれたのです。お父さんはもいちどちよつとこつ
ちへ戻られるさうですが、高田さんはやつぱり向ふの學校に入るのださうです。向ふには
お母さんも居られるのですから。」

「何して會社で呼ばつたべす。」 一郎がききました。

「このモリブデンの鑛脈は當分手をつけなれないことになつた爲なさうです。」

「さうでないな。やつぱりあいづは風の又三郎だつたな。」 嘉助が高く叫びました。

宿直室の方で何かごとごと鳴る音がしました。先生は赤いうちはをもつて急いでそつち
へ行きました。

二人はしばらくだまつたまま、相手がほんたうにどう思つてゐるか探るやうに顔を見合
せたまま立ちました。

風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました。

註 (1)むぞやな 可愛想にの意。

(2)そのわろは その子供はの意。

(3)まゆんだであ 償ふの意。即ち舊通りにしておけ。

岩手公園

「かなた」と老いしタビングは、

杖をはるかにゆびさせど、

東はるかに散亂の、

さびしき銀は聲もなし。

なみなす丘はぼうぼうと、

青きりんごの色に暮れ、

大學生のタビングは、

口笛軽く吹きにけり。

老いたるミセスタッピング、

「去年^{こぞ}なが姉はここに^{こゝ}して、

中學生の一組に、

花のことばを教へしか。」

弧光燈^{アークライト}にめくるめき、

羽蟲の群のあつまりつ、

川と銀行木のみどり、

まちはしづかにたそがるる。

橋場線七つ森下を過ぐ

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし。

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし、 黒雲そこにてただ亂れたり。

七つ森の雪にうづみしひとつなり、 けむりの下を通りくるもの。

月の下なる七つ森のそのひとつなり、 かすかに雪の皺たたむもの。

月をうけし七つ森のはてのひとつなり、 さびしき谷をうちいだくもの。

月の下なる七つ森のその三つなり、 小松まばらに雪を着るもの。

月の下なる七つ森のその二つなり、 オリオンと白き雲とをいただけるもの。

七つ森の二つがなかのひとつなり、 鑽石など掘りしあとのあるもの。

月の下なる七つ森のなかのひとつなり、 雪白白と裾を引くもの。

月の下なる七つ森のその三つなり、 白白として起伏するもの。

七つ森の三つがなかのひとつなり、 貝のぼたんをあまた噴くもの。

月の下なる七つ森のはてのひとつなり、 けはしく白く稜立てるもの。

稜立てる七つ森のそのはでのもの、 旋り了りてまこと明るし。

鳥百態

雪のたんぽのあぜみちを、ぞろぞろあるく鳥なり。

雪のたんぽに身を折りて、二聲鳴けるからすなり。

雪のたんぽに首を垂れ、雪をついばむ鳥なり。

雪のたんぽに首をあげ、あたり見まはす鳥なり。

雪のたんぽの雪の上、よちよちあるくからすなり。

雪のたんぽを歩きつくし、雪をついばむからすなり。

たんぽの雪の高みにて、口をひらきしからすなり。

たんぽの雪にくちばしを、じつとうづめしからすなり。

雪のたんぽのかれ畦に、びよんと飛びたるからすなり。

雪のたんぽをかちとりて、ゆるやかに飛ぶからすなり。

雪のたんぽをつぎつぎに、西へ飛びたつ鳥なり。

雪のたんぽに残されて、脚をひらきしからすなり。

西にとび行くからすらは、あたかもごまのごとくなり。

旱害地帯

多くは業にしたがひて、指うちやぶれ眉くらき、學びの兒らの群なりき。
花と侏儒とを語れども、刻めるごとく眉くらき、稔らぬ土の兒らなりき。

……村に縣にかの兒らの、二百とすれば四萬人、四百とすれば九萬人……
ふりさけ見ればそのあたり、藍暮れそむる松むらと、かじろき雪のけむりのみ。

月天上穹

(擬古調)

兜の尾根のうしろより

月天ちらとのぞきたまへり

月天子ほのかにのぞみたまへども

野の雪いまだ暮れやらす

しばし山はにたゆたひおはす

決然として月天子

山をいでたちたまひつつ

その横雪の黒雲の

さだめの席に入りませりけり

月天子むねてんしまことはいまだ出でまさず

そはみひかりの異りて

赤きといとど歪みませると

月天子み丈のなかば黒雲に

うづもれまして笑みたまひけり

なめげにも人人高くもの云ひつ

ことなく仰ぎまつりしゆゑ

月天子むねてんしまた山に入ります

兜の尾根のうしろより

さも月天子ふたたびのぞみ出でたまふなり

月天子こたびはそらをうちすぐる

氷雲の中に坐しまして

無生を観じたまふさまなり

月天子氷雲を深く入りませど

空華くわは青く降りしきりけり

月天子すでに氷雲を出でまして

雲あたふたと奔せされば

いまはた怨親平等の

ひかりを野にぞながしたまへり

早春

黒雲峽を亂れ飛び、 技師ら亞炭の火に寄りぬ。

げにもひとびと崇むるは、 青き Gossan 銅の脈、

わが索むるはまことのことば、

雨の中なる眞言なり。

選舉

(もつて二十を贏ち得んや) はじめの驚馬をやらふもの。

(さらに五票もかたからず) 雲うち噛める次の騎者。

(いかにやさらば太兵衛一族) その馬弱くまだらなる。

(いなうべがはじうべがはじ) 懼るる聲はそらにあり。

老農

火雲むらがり翔べば、そのまなこはばみてうつろ。

火雲あつまり去れば、麥の束遠く散り映ふ。

タビング ヘンリー・タツピング氏は北米オハイオ州に生る。盛岡バプテス
ト教會布教師として大正六年まで在住せられ、ジー・エフ・タツピング夫
人との間に、當時大學生たりし、ヘレン・タツピング嬢、ウキラード・タ
ツピング氏あり。

鶯宿 盛岡市西南約六里。岩手郡山中の温泉。

「花と侏儒とを語れども」侏儒は一寸法師。「童話を話したけれども」の意。

兜 兜明神嶽の意ならん。盛岡市東方約五里。一〇〇七米の山。

Gossan 「露頭」又は「髑髏」と言ひ、金屬礦床が地表に露出せる場所。

なめげに 軽んずる状。

火雲 ひでりぐも。

北守將軍と三人兄弟の醫者

一、三人兄弟の醫者

むかしラユーといふ首都に、兄弟三人の醫者が居た。いちばん上のリンパーは、普通の
人の醫者だつた。その弟のリンパーは、馬や羊の醫者だつた。いちばん末のリンポーは、
草だの木だのの醫者だつた。そして兄弟三人は、町のいちばん南にあたる、黄いろな崖の
とつばなへ、青い瓦の病院を、三つならべて建ててゐて、てんでに白や朱の旗を、風には
たばた言はせてゐた。

坂のふもとで見ると、漆にかぶれた坊さんや、少しびつこをひく馬や、萎れかかつ
た牡丹の鉢を、車につけて引く園丁や、いんこを入れた鳥籠や、次から次とのぼつて行つ

て、さて坂上に行き着くと、病氣の人は左のリンパー先生へ、馬や羊や鳥類は中のリンパー先生へ、草木をもつた人たちは右のリンパー先生へ、三つにわかれてはいるのだつた。さて三人は三人とも、實に醫術もよくできて、また仁心も相當あつて、たしかにもはや名醫の類であつたのだが、まだいい機會がなかつたために別に位もなかつたし、遠くへ名前も聞えなかつた。ところがとうとうある日のこと、ふしぎなことが起つてきた。

二、北守將軍ソンバーユ

ある日のちやうど日の出ごろ、ラユの町の人たちは、はるかな北の野原の方で、鳥か何かがたくさん群れて、聲をそろへて鳴くやうな、をかした音を、ときどき聞いた。はじめは誰も氣にかけず、店を掃いたりしてゐたが、朝めしすこしすぎたころ、だんだんそれが近づいて、みんな立派なチャルメラや、ラツパの音だとわかつてくると、町ぢゆうにはかにざわざわした。その間にはばたばたといふ、太鼓の類の音もする。もう商人も職人も、仕事ですこしも手につかない。門を守つた兵隊たちは、まづ門をみなしつかりとざし、町

をめぐつた壁の上には、見張りの者をならべて置いて、それからお宮へ知らせを出した。そしてその日の午ちかく、ひづめの音や鎧の氣配、また號令の聲もして、向ふはすつかり、この町を、圍んでしまつた模様であつた。

番兵たちや、あらゆる町の人たちが、まるでときどきやりながら、矢を射る孔からのぞいて見た。壁の外から北の方、まるで雲霞の軍勢だ。ひらひらひかる三角旗や、ほこがさながら林のやうだ。ことになんとも奇體なことは、兵隊たちが、みな灰いろでぼさぼさして、なんだかけむりのやうなのだ。するどい眼をして、ひげが二いろまの白な、せなかのまがつた大將が、尻尾が籐のかたちになつて、うしろにびんとびてゐる白馬に乗つて先頭にたち、大きな劔を空にあげ、聲高高と歌つてゐる。

北守將軍ソンバーユは

いま塞外の沙漠から

やつとのことで戻つてきた

勇ましい凱旋だと言ひたいが

實はすつかり参つて來たのだ

とにかくあすこは寒い處さ

三十年といふ黄いろなむかし

おれは十萬の軍勢をひきゐ

この門をくぐつて威張つて行つた

それからどうだもう見るものは空ばかり

風は乾いて砂を吹き

雁さへ干せてたびたび落ちた

おれはその間馬でかけ通し

馬がつかれてたびたびペタンと坐り

涙をためてはじつと遠くの砂を見た

その度ごとにおれは鎧のかくしから

鹽をすこうし取り出して

馬に嘗めさせては元氣をつけた

その馬も今では三十五歳

五里かけるにも四時間かかる

それからおれはもう七十だ

とても歸れまいと思つてゐたが

ありがたや敵が残らず脚氣で死んだ

今年の夏はへんに濕氣が多かつたでな

それに脚氣の原因が

あんまりこつちを遣ひかけて

砂を走つたためなんだ

さうしてみればどうだやつぱり凱旋だらう

殊にも一つほめられていいことは

十萬人もでかけたものが

九萬人まで戻つて来た

死んだやつらは氣の毒だが

三十年の間には

たとへいくさに行かなくなつて

一割ぐらゐるは死ぬんぢやないか

そこでラユーのむかしのともよ

またこどもらよきやうだいよ

北守將軍ソンバーユーと

その軍勢が歸つたのだ

門をあけてもいいではないか

さあ城壁のこつちでは、湧きたつたやうな騒動だ。うれしまぎれに泣くものや、両手をあげて走るもの、じぶんで門をあけようとして、番兵たちに叱られるもの、もちろん王のお宮へは使が急いで走つて行き、城門の扉はぎいつと開いた。おもての方の兵隊たちも、

もううれしくて、馬にすがつて泣いてゐる。

顔から肩から灰いろの、北守將軍ソンバーユーは、わざとくしゃやくしゃ顔をしかめ、しづかに馬のたづなをとつて、まつすぐを向いて先頭に立ち、それからラツパや太鼓の類、三角ばたのついた槍、まつ青に錆びた銅のほこ、それから白い矢をしよつた、兵隊たちが入つてくる。馬は太鼓に歩調を合せ、殊にもさきのソン將軍の白馬は、歩くたびに膝がきちぎち音がして、ちやうどひやうしをとるやうだ。兵隊たちは軍歌をうたふ。

みそかの晩とついたちは

沙漠に黒い月が立つ

西と南の風の夜は

月は冬でもまつ赤だよ

雁が高みを飛ぶときは

敵が遠くへ遁げるのだ

追はうと馬にまたがれば

にはかに雪がどしやぶりだ

兵隊たちは進んで行つた。九萬の兵といふものは、ただ見ただけでもぐつたりする。

雪の降る日はひるまでも

そらはいちめんまつくらで

わづかに雁の行くみちが

ぼんやり白く見えるのだ

砂がここえて飛んできて

枯れたよもぎをひつこねく

抜けたよもぎは次次と

都の方へ飛んで行く

みんなは、みちの兩側に、垣をきづいて、ぞろつとならび、涙を流してこれを見た。

かくて、バーユー將軍が、三町ばかり進んで行つて、町の廣場についたとき、向ふの宮の方角から、黄いろな旗がひらひらして、誰かこつちへやつてくる。これはたしかに知

らせが行つて、王から迎へが來たのである。

ソン將軍は馬をとめ、ひたひに高く手をかさし、よくよくそれを見きはめて、それから俄かに一禮し、急いで馬を降りようとした。ところが馬を降りられない。もう將軍の兩足は、しつかり馬の鞍につき、鞍はこんどはがつしりと、馬の背中にくつついて、もうどうしてもはなれない。さすが豪氣の將軍も、すつかりあわてて赤くなり、口をびくびく横に曲げ、一生けん命、はね降りようとするのだが、どうにもからだがうごかなかつた。ああこれこそじつに將軍が、三十年も、國境の空氣の乾いた沙漠のなかで、重いつとめを肩に負ひ、一度も馬を降りないために、馬とひとつになつたのだ。おまけに沙漠のまん中で、どこにも草の生えるところがなかつたために、多分はそれが將軍の顔を見附けて生えたのだらう。灰いろをしたふしぎなものが、もう將軍の顔や手や、まるでいちめん生えてゐた。兵隊たちにも生えてゐた。そのうち使ひの大臣は、だんだん近くやつて來て、もうまつさきの大きな槍や、旗のしるしも見えて來た。

「將軍、馬を降りなさい。王様からのお迎へです。將軍、馬を降りなさい。」向ふの列で

誰か言ふ。將軍はまた手をばたばたしたが、やつぱりからだはなれない。

ところが迎への大臣は、鮒よりひどい近眼だつた。わざと馬からおりないで、両手を振つて、みんなに何か命令してると考へた。

「謀叛だな。よし。引き上げる。」さう大臣はみんなに言つた。そこで大臣一行は、くるつと馬を立て直し、黄いろな塵をあげながら、一目散に戻つて行く。ソン將軍はこれを見て、肩をすぼめてため息をつき、しばらくぼんやりしてゐたが、俄かにうしろを振り向いて、軍師の長を呼び寄せた。

「おまへはすぐに鎧を脱いで、おれの刀と弓をもち、早くお宮へ行つてくれ。それから誰かにかう言ふのだ。北守將軍ソンバーユーは、あの國境の沙漠の上で、三十年のひるも夜も、馬から降りるひまがなく、とうとうからだか鞍につき、そのまた鞍が馬について、どうにもお前へ出られません。これからお醫者に行きまして、やがて參内いたします。かうていねいに言つてくれ。」

軍師の長はうなづいて、すばやく鎧と兜を脱ぎ、ソン將軍の刀をもつて、一目散にかけ

て行く。ソン將軍はみんなに言つた。

「全軍しづかに馬をおり、兜をぬいで地に坐れ。ソン大將はただ今から、ちよつとお醫者へ行つてくる。そのうち音をたてないで、じいつとやすんでゐてくれい。わかつたか。」

「わかりました。將軍。」兵隊共は聲をそろへて一度に叫ぶ。將軍はそれを手で制し、急いで馬に鞭うつた。たびたびべたんと沙漠に寝た、この有名な白馬は、ここで最後の力を出し、がたがたがた鳴りながら、風より早くかけ出した。さて將軍は十町ばかり、夢中で馬を走らせて、大きな坂の下に來た。それから俄かにかう言つた。

「上手な醫者はいつたい誰だ。」

一人の大工が返事した。

「それはリンパー先生です。」

「そのリンパーはどこに居る。」

「すぐこの坂の上です。あの三つある旗のうち一番左でございます。」

「よろしい、しゆう。」と將軍は、例の白馬に一鞭かれて、一気に坂をかけあがる。大工

はあとでぶつぶつ言った。

「何だ、あいつは野蠻なやつだ。ひとからものを教はつて、よろしい、しゅう。とはいつたいなんだ。」

ところがバーユー將軍は、そんなことには構はない。そこらをうろろあるいてゐる、病人たちをはね越えて、門の前まで上つてゐた。なるほど門のはしらには、小醫リンパー先生と、金看板がかけてある。

三、リンパー先生

さてリンパー將軍は、いまやリンパー先生の、大支關を乗り切つて、どしどし廊下へ入つて行く。さすがはリンパー病院だ、どの天井も室の扉も、高さが二丈ぐらゐある。

「醫者はどこかね。診てもらひたい。」

ソン將軍は號令した。

「あなたは一體何ですか。馬のまんまで入るとは、あんまり亂暴すぎませう。」

萌黄の長い服を着て、頭を剃つた一人の弟子が、馬のくつわをつかまへた。

「おまへが醫者のリンパーか、早くわが輩の病氣を診ろ。」

「いいえ、リンパー先生は、向ふの室に居られます。けれどもご用がおありなら、馬から降りていただきたい。」

「いいや、そいつができんのぢや。馬からすぐに降りれたら、今ごろはもう王様の、前へ行つてた筈なんぢや。」

「ははあ、馬から降りられない。そいつは脚の硬直だ。そんならいいです。おいでなさ

501

弟子は向ふの扉をあけた。ソン將軍はばかばかと、馬を鳴らしてはいつて行つた。中には人がいつばいで、そのまん中に先生らしい、小さな人が牀几に坐り、しきりに一人の眼を診てゐる。

「ひとつつちをたのむのぢや。馬から降りられないでなう。」さう將軍はやさしく言つた。

ところがリンパー先生は、見向きもしないし動きもしない。やつぱりじつと眼を診て
る。

「おい、きみ、早くこつちを診んか。」將軍が怒鳴り出したので、病人たちはびくつとし
た。ところが弟子がしづかに言った。

「診るには番がありますからな。あなたは九十六番でいま六人目ですから、もう九十人お
待ちなさい。」

「黙れ、きさまは我輩に八十一人待てと言ふか、おれを誰だと考へる。北守將軍ソンパー
ユ一だ。九萬人もの兵隊を、町の廣場に待たせてある。おれが一人を待つことは八萬一千
の兵隊が向ふの方で待つことだ。すぐ見ないならけちらすぞ。」將軍はもう鞭をあげ、馬
は一いきにはねあがり、病人たちは泣きだした。ところがリンパー先生は、やつぱりびく
ともしてゐない、てんでこつちを見もしない。その先生の右手から、黄の綾を着た娘が立
つて、花瓶にさした何かの花を、一枝とつて水につけ、やさしく馬につきつけた。馬はば
くつとそれを噛み、大きな息を一つして、べたんと四つ脚を折り、今度はごうごういびき

をかいて、首を落してねむつてしまふ。

ソン將軍はまごついた。

「あ、馬のやつ、又參つたな。困つた。困つた。困つた。」と言つて、急いで鎧のかくし
から、鹽の袋をとりだして、馬に喰べさせようとする。

「おい、起きんかい。あんまり情けないやつだ。あんなにひどく難儀して、やつと都に歸
つて來ると、すぐ氣がゆるんで死ぬなんて、ぜんたいどういふ考へなのか。こら、起きん
かい。起きんかい。しつ、ふう、どう、おい、この鹽を、ほんの一口たべんかい。」それ
でも馬は、やつぱりぐうぐうねむつてゐる。

ソン將軍はとうとう泣いた。

「おい、きみ、わしはとにかく、馬だけどうかみてくれたまへ。こいつは北の國境で、三
十年もはたらいたのだ。」むすめはだまつて笑つてゐたが、このときリンパー先生が、い
きなりこつちを振り向いて、まるで將軍の胸底から、馬の頭も見徹すやうな、するどい眼
をしてしづかに言った。

「馬はまもなく治ります。あなたの病氣をしらべるために、馬を坐らせただけです。あなたはそれで向ふの方で、何か病氣をしましたか。」

「いや、病氣はしなかつた。病氣は別にしなかつたが、狐のために欺だまされて、どうもとき困つたぢや。」

「それは、どういふ風ですか。」

「向ふの狐はいかんのぢや。十萬近い軍勢を、ただ一ぺんに欺すんぢや。夜に澤山火をともしたり、晝間いきなり沙漠の上に、大きな海をこしらへて、城や何かも出したりする。全くたちが悪いんぢや。」

「それは狐がしますのですか。」

「狐とそれから、砂鶻さこぢやね、砂鶻というて鳥なんぢや。こいつは人の居らないときは、高い處を飛んでゐて、誰かを見ると試しに来る。馬のしつぽを抜いたりね。目をねらつたりするもんで、こいつらがでたらもう馬は、がたがたふるへてようあるかんね。」

「それなら一ぺん欺されると、何日ぐらゐでよくなりますか。」

「まあ四日ぢやね。五日のときもあるやうぢや。」

「それであなたは今までに、何べんぐらゐ欺されました？」

「ごく少くて十べんぢやらう。」

「それではお尋ねいたします。百と百とを加へると答はいくらになりますか。」

「百八十ぢや。」

「それでは二百と二百では。」

「さやう、三百六十だらう。」

「そんなら一つ伺ひますが、十の二倍は何ほどですか。」

「それはもちろん十八ぢや。」

「なるほど、すつかりわかりました。あなたは今でもまだ少し、沙漠のためにつかれてゐます。つまり十パーセントです。それではなほしてあげませう。」

パー先生は兩手をふつて、弟子にしたくを言ひ附けた。弟子は大きな銅鉢どうはちに、何かの薬をいつぱい盛つて、布巾ふきんを添へて持つて來た。ソン將軍は兩手を出して、鉢をきちんと受

けとつた。パー先生は片袖をまくり、布巾ふきんに薬をいつぱいひたし、かぶとの上からさぶさぶかけて、両手でそれをゆすぶると、兜かぶとはすぐにすばりととれた。弟子がも一人、もひとつの別の銅鉢へ、別の薬をもつてきた。そこでリンパー先生は、別の薬でぢやぶぢやぶ洗ふ。鞆しんごはまるでまつ黒だ。ソン將軍は心配さうに、うつむいたまま訊いてゐる。

「どうかね、馬は大丈夫かね。」

「もうぢきです。」とパー先生は、つづけてぢやぶぢやぶ洗つてゐる。鞆がだんだん茶いろになつて、それから黄いろになつた。それからとうとう色もなく、ソン將軍の白髪は、白熊よりも輝いた。そこでリンパー先生は、布巾を捨てて両手を洗ひ、弟子は頭と顔を拭く。將軍はぶるつと身ぶるひして、馬はきちんと起きあがる。

「どうです、せいせいしたでせう。ところで百と百とをたすと答はいくらになりますか。」

「もちろんそれは二百だらう。」

「そんなら二百と二百とたせば。」

「さやう、四百にちがひない。」

「十の二倍はどれだけですか。」

「それはもちろん二十ぢやな。」さつきのこととは忘れた風で、ソン將軍はけろりと言ふ。

「すつかりおなほりになりました。つまり頭の目がふさがつて、一割いけなかつたのですな。」

「いやいや、わしは勘定などの、十や二十はどうでもいいんぢや。それは軍師がやるのでう、わしは早速この馬と、わしをはなしてもらひたいんぢや。」

「なるほどそれはあなたの足を、あなたの服と引きはなすのは、すぐ私に出来るのです。いやもう離れてゐる筈です。けれども、ズボンが鞍につき、鞍がまた馬についたのを、はなすといふのは別ですな。それはとなりで、私の弟がやつてゐますから、そつちへおいでをいただきます。それにいつたいこの馬もひどい病氣にかかつてゐます。」

「そんならわしの顔から生えた、このもちやもちやはどうぢやらう。」

「そちらもやつぱり向ふです。とにかくひとつとなりの方へ、弟子をお供に出しませう。」

「それではそつちへ行くでしょう。ではさやうなら。」

さつきの黄色いきものをつけた、むすめが馬の右耳に、息を一つ吹き込んだ。馬はがばつとはねあがり、ソン將軍は俄かに背が高くなる。將軍は馬のたづなをとり、弟子とならんで室を出る。それから庭をよこぎつて、厚い土塀の前に来た。小さなくぐりがあいてゐる。「いま裏門をあけさせませう。」助手は襜褕を入つて行く。

「いいや、それには及ばない。わたしの馬はこれぐらゐ、まるで何とも思つてやしない。」將軍は馬にむちをやる。

ぎつ、ばつ、ふう。馬は土塀をはね越えて、となりのリンプー先生の、けしのはたけをめちやくちやに、踏みつけながら、立つてゐた。

四、馬醫リンプー先生

ソン將軍が、お醫者の弟子と、けしの畑をふみつけて向ふの方へ歩いて行くと、もうあつちからも、こつちからも、ぶるるるふうといふやうな、馬の仲間の聲がする。そして二人が正面の、巨きな棟にはいつて行くと、もう四方から馬どもが、二十四もかけて来て、

蹄をことこと鳴らしたり、頭をぶらぶらしたりして、將軍の馬に挨拶する。

向ふでリンプー先生は、首のまがつた茶いろの馬に、白い薬を塗つてゐる。さつきの弟子が進んで行つて、ちよつと何かをささやくと、馬醫のリンプー先生は、わらつてこつちをふりむいた。巨きな鐵の胸甲を、がつしりはめてゐることは、ちやうどやつぱり鎧のやうだ。馬にけられぬためらしい。將軍はすぐその前へ、じぶんの馬を乗りつけた。

「あなたがリンプー先生か。わしは將軍ソンバーユーチや、何分ひとつたのみたい。」

「いや、その由を伺ひました。あなたの馬はたしか三十九ぐらゐですな。」

「四捨五入して、さうぢや、やつぱり三十九ぢやな。」

「ははあ、ただいま手術いたします。あなたは馬の上に居て、すこし煙いかしれません。それを承知くださいますか。」

「煙い？ なんのどうして煙ぐらゐ、沙漠で風の吹くときに、一分間に四十五以上、馬を跳躍させるんぢや、それを三つも、やすんだら、もう頭まで埋まるんぢや。」

「ははあ、それではやりませう。おい、フーシュ。」プー先生は弟子を呼ぶ。弟子はおじ

ぎを一つして、小さな壺をもつて来た。プー先生は蓋をとり、何か茶いろな薬を出して馬の眼に塗りつけた。それから、「プーシユ」とまた呼んだ。弟子はおじぎを一つしてとなりの室へ入つて、しばらくごととしてゐたが、まもなく赤い小さな餅を、皿につけて歸つて来た。先生はそれをつまみあげ、しばらく指ではさんだり、匂をかいたりしてゐたが、何か決心したらしく、馬にばかりと喰べさせた。ソン將軍は、その白馬の上に居て、待ちくたびれてあくびをした。すると俄かに白馬は、がたがたがたがたふるへ出し、それから、からだ一面に、あせとけむりを噴き出した。プー先生はこはさうに、遠くへ行つてながめてゐる。がたがたがたがた鳴りながら、馬はけむりをつづけて噴いた。そのまた煙が無暗に辛い。ソン將軍も、はじめは我慢してゐたが、とうとう両手を眼にあてて、ごほんごほんとききをした。そのうちだんだんけむりは消えて、こんどは、汗が瀧よりひどくながれだす。プー先生は近くへよつて、両手をちよつと鞍にあて、二つばかりゆすぶつた。たちまち鞍はすばりとはなれ、はづみを喰つた將軍は、床にすつと落された。ところがさすが將軍だ。いつかきちんと立つてゐる。おまけに鞍と將軍も、もうすつかりとはな

れてゐて、將軍はまがつた兩足を、両手でばしやばしや叩いたし、馬は俄かに荷がなくなつて、さも見當がつかないらしく、せなかをゆらゆらゆすぶつた。するとバニュー將軍はこんどは馬のはうきのやうなしつぽを持つて、いきなりぐつと引つ張つた。すると何やらまつ白な、尾の形した塊が、ごとりと床にころがり落ちた。馬はいかにも軽さうに、いまは全く毛だけになつたしつぽを、ふさふさ振つてゐる。弟子が三人集つて、馬のからだをすつかりふいた。

「もういいだらう。歩いてごらん。」馬はしづかに歩きだす。あんなにきちぎち軋んだ膝が、いまではすつかり鳴らなくなつた。プー先生は手をあげて、馬をこつちへ呼び戻し、おじぎを一つ將軍にした。

「いや謝しますぢや。それではこれで。」將軍は、急いで馬に鞍を置き、ひらりとそれにもたがれば、そこらあたりの病氣の馬は、ひんひん別れの挨拶をする。ソン將軍は室を出て、塀をひらりと飛び越えて、となりのリンポー先生の、菊のはたけに飛び込んだ。

五、リンポー先生

さてリンポー先生の、草木を治すその室は、林のやうなものだつた。あらゆる種類の木や花が、そこらいつばいならべてあつて、どれにもみんな金だの銀の、巨きな札がついてゐる。そこを、バーユー將軍は、馬から下りて、ゆつくりと、ポー先生の前へ行く。さつきの弟子がさきまはりして、すつかり話してゐたらしく、ポー先生は藥の函と大きな赤い團扇をもつて、ごくうやうやしく待つてゐた。ソン將軍は手をあげて、

「これぢや。」と顔を指さした。ポー先生は黄いろな粉を、藥箱から取り出して、ソン將軍の顔から肩へ、もういつばいにふりかけて、それから例のうちはをもつて、ばたばたたばた煽ぎ出す。するとたちまち、將軍の顔ぢゆうの毛はまつ赤に變り、みんなふわふわ飛び出して、見てゐるうちに將軍は、すつかり顔がつるつるになつた。じつにこのとき將軍は、三十年ぶりでにつこりした。

「それではこれで行きませうぢや。からだもかるくなつたでなう。」もう將軍はうれしくて、

はやてのやうに室を出て、おもての馬に飛び乗れば、馬はたちまち病院の、巨きな門を外に出た。あとから弟子が六人で、兵隊たちの顔から生えた灰いろの毛をとるために、藥の袋とうちはをもつて、ソン將軍を追ひかけた。

六、北守將軍仙人となる

さてソンバーユー將軍は、ポー先生の玄關を、光のやうに飛び出して、となりのリンポー病院を、はやてのごとく通り過ぎ、次のリンポー病院を、斜めに見ながらも一散に、さつきの坂をかけ下りる。馬は五倍も速いので、もう向ふには兵隊たちの、やすんでゐるのが見えてきた。兵隊たちは心配さうにこつちの方を見てゐたのだが、思はず歡呼の聲をあげ、みんな一緒に立ちあがる。そのときお宮の方からはさつきの使ひの軍師の長が一目散にかけて來た。

「ああ、王様は、すつかりおわかりになりました。あなたのことをおききになつて、おん涙さへ浮べられ、お出でをお待ちでございます。」そこへさつきの弟子たちが、藥をもつ

てやつてきた。兵隊たちはよろこんで、粉をふつてばたばた煽ぐ。そこで九萬の軍隊は、もう輪廓もはつきりなつた。

將軍は高く號令した。「馬にまたがり、氣をつけいつ。」みんなが馬にまたがれば、まもなくそこらはしんとして、たつた二匹の遅れた馬が、鼻をぶるつと鳴らしただけだ。

「前へ進めつ。」太鼓も銅鑼も鳴り出して、軍は肅肅行進した。

やがて九萬の兵隊は、お宮の前の一里の庭に縦横ちやうど三百人、四角に陣をこしらへた。

ソン將軍は馬を降り、しづかに壇をのぼつて行つて床に額をすりつけた。

王はしづかに斯う言つた。

「じつに永らくご苦勞だつた。これからはもうここに居て、大將たちの大將として、なほ忠勤をはげんでくれ。」

北守將軍ソンバーユは、涙を垂れてお答へした。

「おことばまことに畏くて、何とお答へいたしていいか、とみに言葉も出でませぬ。とは

言へ、いまや私は、生きた骨ともいふやうな、役に立たずでございます。沙漠の中に居ました間、どこから敵が見てるか、あなどられまいと考へて、いつでもりんと胸を張り、眼を見開いて居りましたが、いま王様のお前に出て、おほめの詞をいただきますと、俄かに眼さへ見えぬやう。背骨も曲つてしまひます。何卒これでお暇を願ひ、郷里に歸りたうございます。」

「それでは誰かおまへの代り、大將五人の名を擧げよ。」

そこでバーユ將軍は、大將四人の名をあげた。そして残りの一人の代り、リン兄弟の三人を國のお醫者におねがひした。王は早速許されたので、その場でバーユ將軍は、鎧もぬげば兜もぬいで、かさかさ薄い麻を着た。

そしてじぶんの生れた村のス山の麓へ歸つて行つて、粟をすこうし播いたりした。それから粟の間引きもやつたけれども、そのうち將軍はだんだんものを食はなくなつて、せつかくじぶんで播いたりした粟も、一口たべただけ、水がぶがぶのんでゐた。

ところが秋の終りになると、水もさつばりのまなくなつて、ときどき空を見上げては、

何かしやつくりするやうなきたいな形をたびたびした。

そのうちいつか將軍は、どこにも形が見えなくなつた。そこでみんなは將軍さまは、もう仙人になつたと言つて、ス山のいただきへ小さなお堂をこしらへて、あの白馬は神馬に祭り、燈や粟をささげたり、麻ののぼりをたてたりした。

けれどもこのとき國手になつた例のリンパー先生は、會ふ人ごとに斯ういつた。

「どうして、バーユー將軍が、雲だけ食つた筈はない。おれはバーユー將軍の、からだをよくみて知つてゐる。肺と胃の腑は同じでない。きつとどこかの林の中に、お骨があるにちがひない。」

なるほどさうかもしれないと、思つた人もたくさんあつた。

グスコープドロリの傳記

一、森

グスコープドロリは、イーハトーヴオの大きな森のなかに生れました。お父さんは、グスコーナドリといふ名高い木樵で、どんな巨きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるやうに譯なく伐つてしまふ人でした。

ブドリにはネリといふ妹があつて、二人は毎日森で遊びました。ごしつごしつとお父さんの樹を鋸く音が、やつと聽えるくらゐな遠くへも行きました。二人はそこで木莓の實をとつて湧水に漬けたり、空を向いてかはるがはる山鳩の啼くまねをしたりしました。するとあちらでもこちらでも、ぼう、ぼう、と鳥が睡さうに啼き出すのでした。

お母さんが、家の前の小さな畑に麥を播いてゐるときは、二人はみちにむしろをしいて坐つて、ブリキ罐で蘭の花を煮たりしました。するとこんどは、もういろいろの鳥が、二人のばさばさした頭の上を、まるで挨拶するやうに啼きながらさあざあざあ通りすぎるのでした。

ブドリが學校へ行くやうになりますと、森はひるの間大へんさびしくなりました。そのかはりひるすぎには、ブドリはネリといつしよに、森ぢゆうの樹の幹に、赤い粘土や消し炭で、樹の名を書いてあるいたり、高く歌つたりしました。

ホツプの蔓が、両方からのびて、門のやうになつてゐる白樺の樹には、
「カツコウドリ、トホルベカラズ」と書いたりもしました。

そして、ブドリは十になり、ネリは七つになりました。ところがどういふわけですか、その年は、お日さまが春から變に白くて、いつもなら雪がとけると間もなく、まつしろな花をつけるこぶしの樹もまるで咲かず、五月になつてもたびたび霽がぐしゃぐしゃ降り、七月の末になつても一向に暑さが來ないために去年播いた麥も粒の入らない白い穂しかで

きず、大抵の果物も、花が咲いただけで落ちてしまつたのでした。

そしてとうとう秋になりましたが、やつぱり栗の木は青いからのいがばかりでしたし、みんなでふだんたべるいちばん大切なオリザといふ穀物も、一つぶもできませんでした。野原ではもうひどいさわぎになつてしまひました。

ブドリのお父さんもお母さんも、たびたび薪を野原の方へ持つて行つたり、冬になつてからは何べんも巨きな樹を町へそりで運んだりしたのでしたが、いつもがっかりしたやうにして、わづかの麥の粉などをもつて歸つてくるのでした。それでもどうかその冬は過ぎて次の春になり、畑には大切にしまつて置いた種子も播かれましたが、その年もまたすつかり前の年の通りでした。そして秋になると、とうとうほんたうの飢饉になつてしまひました。もうそのころは學校へ來ることも、まるでありませんでした。ブドリのお父さんもお母さんも、すつかり仕事をやめてゐました。そしてたびたび心配さうに相談しては、かはるがはる町へ出て行つて、やつとすこしばかりの黍の粒など持つて歸ることもあれば、なんにも持たずに顔いろを悪くして歸つてくることもありました。そしてみんなは、こな

らの實や、葛やわらびの根や、木の柔らかな皮やいろんなものをたべて、その冬をすごしました。

けれども春が来たころは、お父さんもお母さんも、何かひどい病氣のやうでした。ある日お父さんは、じつと頭をかかへて、いつまでもいつまでも考へてゐましたが、俄かに起きあがつて、

「おれは森へ行つて遊んでくるぞ。」と言ひながら、よろよろ家を出て行きましたが、まつくらになつても歸つて來ませんでした。二人がお母さんに、お父さんはどうしたらうときいても、お母さんはだまつて二人の顔を見てゐるばかりでした。

次の日の晩方になつて、森がもう黒く見えるころ、お母さんは俄かに立つて、爐に櫓をたくさんくべて家ぢゆうすつかり明るくしました。それから、わたしはお父さんをさがしに行くから、お前たちはうちに居てあの戸棚にある粉を二人ですこしづつたべなさいと言つて、やつぱりよろよろ家を出て行きました。二人が泣いてあとから追つて行きますと、お母さんはより向いて、

「何たら言ふことをきかないこどもらだ。」と叱るやうに言ひました。

そしてまるで足早に、つまづきながら森へ入つてしまひました。二人は何べんも行つたり來たりして、そこらを泣いて廻りました。とうとうこらへ切れなくなつて、まつくらな森の中へ入つて、いつかのホップの門のあたりや、湧水のあるあたりをあちこちうろろ歩きながら、お母さんを一晚呼びました。

森の樹の間からは、星がちらちら何か言ふやうにひかり、鳥はたびたびおどろいたやうに暗の中を飛びましたけれども、どこからも人の聲はしませんでした。とうとう二人はぼんやり家へ歸つて中へはいりますと、まるで死んだやうに睡つてしまひました。

ブドリが眼をさましましたのは、その日のひるすぎでした。

お母さんの言つた粉のことを思ひ出して戸棚を開けて見ますと、なかには、袋に入れたそば粉や、こならの實がまだたくさん入つてゐました。ブドリはネリをゆり起して二人でその粉をなめ、お父さんたちがゐたときのやうに爐に火をたきました。

それから、二十日ばかりぼんやり過ぎましたら、ある日戸口で、

「今日は、誰か居るかね。」と言ふものがありました。お父さんが歸つて来たのかと思つて、ブドリがはね出して見ますと、それは籠をしようつた眼の鋭い男でした。その男は籠の中から圓い餅をとり出してぼんと投げながら言ひました。

「私はこの地方の飢饉を救げに來たものだ。さあ何でも食べなさい。」二人はしばらく呆れてゐましたら、「さあ食べるんだ、食べるんだ。」とまた言ひました。二人がこはごはたべはじめますと、男はじつと見てゐましたが、

「お前たちはいい子供だ。けれどもいい子供だといふだけでは何にもならん、わしと一緒にいておいで。尤も男の子は強いし、わしも二人はつれて行けない。おい女の子、おまへはここにゐてももうたべるものがないんだ。をちさんと一緒に町へ行かう。毎日パンを食べさせてやるよ。」そしてぶいつとネリを抱きあげて、せなかの籠へ入れて、そのまま「おおほいほい。おおほいほい。」とどなりながら、風のやうに家を出て行きました。ネリはおもてではじめてわつと泣き出し、ブドリは、

「どろばう、どろばう。」と泣きながら叫んで追ひかけましたが、男はもう森の横を通つてすうつと向ふの草原を走つてゐて、そこからネリの泣き聲が、かすかにふるへて聞えるだけでした。

ブドリは、泣いてどなつて森のはづれまで追ひかけて行きましたが、とうとう疲れてばつたり倒れてしまいました。

二、てぐす工場

ブドリがふつと眼をひらいたとき、いきなり頭の上で、いやに平べつたい声がしました。「やつと眼がさめたな。まだお前は飢饉のつもりかい。起きておれに手傳はないか。」

見るとそれは茶いろなきのこしやつぽをかぶつて外套にすぐシャツを着た男で、何か針金でこさえたものをぶらぶら持つてゐるのでした。

「もう飢饉は過ぎたの？ 手傳へつて何を手傳ふの？」
ブドリがききました。

「網掛けさ。」

「ここへ網を掛けるの？」

「掛けるのさ。」

「網をかけて何にするの？」

「てぐすを飼ふのさ。」見るとすぐブドリの前の栗の木に、二人の男がはしごをかけてのぼつてゐて、一生けん命何か網を投げたり、それを操つたりしてゐるやうでしたが、網も糸も一向見えませんでした。

「あれでてぐすが飼へるの？」

「飼へるのさ。うるさいこどもだな。おい、縁起でもないぞ。てぐすも飼へないところにどうして工場なんか建てるんだ。飼へるともさ。現におれをはじめ澤山のものが、それにくらしを立ててゐるんだ。」

ブドリはかすれた聲で、やつと、

「さうですか。」と言ひました。

「それにこの森は、すっかりおれが買つてあるんだから、ここで手傳ふならいいが、さうでもなければどこかへ行つて貰ひたいね。もつともお前はどこへ行つたつて食ふものもなからうぜ。」

ブドリは泣き出しさうになりましたが、やつとこらへて言ひました。

「そんなら手傳ふよ。けれどもどうして網をかけるの？」

「それは勿論教へてやる。こいつをね。」男は手に持った針金の籠のやうなものを両手で引き伸ばしました。

「いいか。かういふ工合にやるとはしごになるんだ。」

男は大股に右手の栗の木に歩いて行つて、下の枝に引つ掛けました。

「さあ、今度はおまへがこの網をもつて上へのぼつて行くんだ。さあ、のぼつてごらん。」男は變なまりのやうなものをブドリに渡しました。ブドリは仕方なくそれをもつてはしごにとりついて登つて行きましたが、はしごの段段がまるで細くて手や足に喰ひこんでちぎれてしまひさうでした。

「もつと登るんだ。もつと、もつとさ。そしたらさつきのみりを投げてごらん。栗の木を越すやうにさ。そいつを空に投げるんだよ。何だい、ふるへてるのかい。意氣地なしだなあ。投げるんだよ。投げるんだよ。そら、投げるんだよ。」

ブドリは仕方なく力一杯にそれを青空に投げたと思ひましたら、俄かにお日さまがまっ黒に見えて逆さまに下へ墜ちました。そしていつか、その男に受けとめられてるたのでした。男はブドリを地面におろしながらぶりぶり憤り出しました。

「お前もいくちのないやつだ。何といふふにやふにやだ。俺が受け止めてやらなかつたらお前は今ごろは頭がはじけてるたらう。おれはお前の命の恩人だぞ。これからは、失禮なことを言つてはならん。ところで、さあ、こんどはあつちの木へ登れ。も少したつたらごはんもたべさせてやるよ。」男はまたブドリへ新しいまりを渡しました。ブドリははいごをもつて次の樹へ行つてまりを投げました。

「よし、なかなか上手になつた。さあまりは澤山あるぞ。なまけるな。樹も栗の木ならどれでもいいんだ。」

男はポケットから、まりを十ばかり出してブドリに渡すと、すたすた向ふへ行つてしまひました。ブドリはまた三つばかりそれを投げましたが、どうしても息がはあはあしてやらだがるくてたまらなくなりました。もう家へ歸らうと思つて、そつちへ行つて見ますと、愕おどろいたことには、家にはいつか赤い土管の煙突がついて、戸口には、

「イーハトーヴオてぐす工場」といふ看板がかかつてゐるのです。そして中からたばこをふかしながらさつきさつきの男が出て來ました。

「さあこども、たべものをもつてきてやつたぞ。これを食べると暗くならないうちにもう少し稼かせぐんだ。」

「ぼくはもういやだよ。うちへ歸るよ。」

「うちつていふのはあすこか、あすこはおまへのうちぢやない。おれのでぐす工場だよ。あの家もこの邊の森もみんなおれが買つてあるんだからな。」

ブドリはもうやけになつて、だまつてその男のよこした蒸しパンをむしやむしやたべて、またまりを十ばかり投げました。

その晩ブドリは、昔のじぶんのうち、いまはてぐす工場になつてゐる建物の隅に、小さくなつてねむりました。

さつきの男は、三四人の知らない人たちと遅くまで爐ばたで火をたいて、何か呑んだりしやべつたりして居ました。次の朝早くから、ブドリは森に出て、昨日のやうにはたらしませんでした。

それから一月ばかりたつて、森ぢゆうの栗の木に網がかかつてしまひますと、てぐす飼ひの男は、こんどは栗のやうなものがいつばいついた板きれを、どの木にも五六枚づつ吊させました。そのうちに木は芽を出して森はまつ青になりました。すると、樹につるした板きれから、たくさん小さな青じろい蟲が絲をつたはつて列になつて枝へ這ひあがつて行きました。

ブドリたちはこんどは毎日薪とりをさせられました。その薪が、家のまはりに小山のやうに積み重なり、栗の木が青じろい紐のかたちの花を枝いちめんにつけるころになりますと、あの板から這ひあがつて行つた蟲も、ちやうど栗の花のやうな色とかたちになりました。

た。そして森ぢゆうの栗の葉は、まるで形もなくその蟲に喰ひ荒らされてしまひました。

それから間もなく蟲は、大きな黄いろな繭を、網の目ごとにかけてはじめました。

すると、てぐす飼ひの男は、狂氣のやうになつて、ブドリたちを叱りとばして、その繭を籠に集めさせました。それをこんどは片つばしから鍋に入れてぐらぐら煮て、手で車をまはしながら絲をとりました。夜も晝もがらがら三つの絲車をまはして絲をとりました。かうしてこしらへた黄いろな絲が小屋に半分ばかりたまつたころ、外に置いた繭からは、大きな白い蛾がぼろぼろ飛びだしはじめました。てぐす飼ひの男は、まるで鬼みたいな顔つきになつて、じぶんも一生けん命絲をとりましたし、野原の方からも四人の人を連れてきて働かせました。けれども蛾の方は日ましに多く出るやうになつて、しまひには森ぢゆうまるで雪でも飛んでゐるやうになりました。するとある日、六七臺の荷馬車が来て、いままでにできた絲をみんなつけて、町の方へ歸りはじめました。みんなも一人づつ荷馬車について行きました。いちばんしまひの荷馬車がたつたとき、てぐす飼ひの男が、ブドリに、

「おい、お前の來春まで食ふくらるのものは家の中に置いてやるからな。それまでここで森と工場の番をしてゐるんだぞ。」

と言つて變ににやにやしなながら、荷馬車についてさつさへ行つてしまひました。

ブドリはぼんやりあとへ残りました。うちの中はまるで汚きたなくて、嵐のあとのやうでしたし、森は荒れはてて山火事にでもあつたやうでした。ブドリが次の日、家のなかやまはりを片付けはじめましたら、てぐす飼ひの男がいつも坐つてゐた所から古いボール紙の函はこを見付けました。中には十冊ばかりの本がぎつしり入つて居りました。開いて見ると、てぐすの繪や機械の圖がたくさんありました。まるで讀めない本もありましたし、いろいろな樹や草の圖と名前の書いてあるものもありました。

ブドリはいつしやうけんめい、その本のまねをして字を書いたり、圖をうつしたりしてその冬を暮しました。

春になりますと又あの男が六七人のあたらしい手下を連れて、大へん立派ななりをしてやつて來ました。そして次の日からすつかり去年のやうな仕事ははじまりました。

そして網はみんなかかり、黄いろな板もつるされ、蟲は枝に這はひ上り、ブドリたちはまた、薪作りにかかることになりました。ある朝ブドリたちが薪をつくつてゐましたら、俄かにぐらぐらつと地震がはじまりました。それからすうつと遠くでどーんといふ音がしました。

しばらくたつと日が變にくらくなり、こまかな灰がばさばさばさ降つて來て、森はいちめんにもつ白になりました。ブドリたちが呆おぼれて樹の下にしやがんでゐましたら、てぐす飼ひの男が大へんあわててやつて來ました。

「おい、みんな、もうだめだぞ。噴火ふんかだ。噴火がはじまつたんだ。てぐすはみんな灰をかぶつて死んでしまつた。みんな早く引き揚げてくれ。おい、ブドリ、お前ここに居たかつたら居てもいいが、こんどはたべ物は置いてやらないぞ。それにここに居ても危いからな、お前も野原へ出て何か稼ぐ方がいいぜ。」

さう言つたかと思ふと、もうどどん走つて行つてしまひました。ブドリが工場へ行つて見たときは、もう誰も居りませんでした。そこでブドリは、しよんぼりとみんなの足跡あしあと

のついた白い灰をふんで野原の方へ出て行きました。

三、沼ばたけ

ブドリは、いつばいに灰をかぶつた森の間を、町の方へ半日歩きつづけました。灰は風の吹くたびに樹からばさばさ落ちて、まるでけむりか吹雪のやうでした。けれどもそれは野原へ近づくほど、だんだん浅く少なくなつて、つひには樹も縁に見え、みちの足跡も見えないくらゐになりました。

とうとう森を出切つたとき、ブドリは思はず眼をみはりました。野原は眼の前から、遠くのまつしろな雲まで、美しい桃いろと緑と灰いろのカードでできてゐるやうでした。そばへ寄つて見ると、その桃いろなものには、いちめんせいひの低い花が咲いてゐて、蜜蜂がいそがしく花から花をわたつてゐるいてゐましたし、緑いろなものには小さな穂を出して草がぎつしり生え、灰いろなのは浅い泥の沼でした。そしてどれも、低い幅のせまい土手でくぎられ、人は馬を使つてそれを掘り起したり掻き廻したりしてはたらいてゐました。

ブドリがその間を、しばらく歩いて行きますと、道のまん中に、二人の人が、大聲で何か喧嘩でもするやうに言ひ合つてゐました。右側の方の鬚の赭い人が言ひました。

「何でもかんでも、おれは山師張るときめた。」

すると一人の白い笠をかぶつた、せいひの高いおぢいさんが言ひました。

「やめろつて言つたらやめろもんだ。そんなに肥料うんと入れて、薬はとれるたつて、實は一粒もとれるもんでない。」

「うんにや、おれの見込では、今年は今までの三年分暑いに相違ない。一年で三年分とつて見せる。」

「やめろ。やめろ、やめろつたら。」

「うんにや、やめない。花はみんな埋めてしまつたから、こんどは豆玉を六十枚入れてそれから鶏の糞百駄入れるんだ。忙しつたら、何のかう忙しくなればささげの蔓でもいいから手傳ひに頼みたいもんだ。」

ブドリは思はず近寄つておじぎをしました。

「そんならぼくを使つてくれませんか。」

すると二人は、ぎよつとしたやうに顔をあげて、あごに手をあててしばらくブドリを見
てゐましたが、赤鬚が俄かに笑ひ出しました。

「よしよし、お前に馬の指竿さしざなとりを頼むからな。すぐおれについて行くんだ。それではま
づ、のるかそるか、秋まで見ててくれ。さあ行かう。ほんとに、ささげの蔓つるでもいいから
頼みたい時でな。」赤鬚は、ブドリとおぢいさんに交かる交かる言ひながら、さつさと先に立
つて歩きました。あとではおぢいさんが、

「年寄りの言ふこと聞かないで、いまに泣くんのだな。」とつぶやきながら、しばらくこつ
ちを見送つてゐるやうでした。

それからブドリは、毎日毎日沼ばたけへ馬を使つて泥を掻き廻しました。一日ごとに桃
いろのカードも緑のカードもだんだん潰つぶされて、泥沼に變るのでした。馬はたびたびびし
やつと泥水をはねあげて、みんなの顔へ打ちつけました。一つの沼ばたけがすめばすぐ次
の沼ばたけへ入るのでした。一日がとても永くて、しまひには歩いてゐるのかどうかわか

らなくなつたり、泥が飴あめのやうな、水がスープのやうな気がしたりするのです。風が何
べんも吹いて来て近くの泥水に魚の鱗うろこのやうな波をたて、遠くの水をブリキいろにして行
きました。そらでは、毎日甘くすっぱいやうな雲が、ゆつくりゆつくりながれてゐて、そ
れがじつにうらやましさうに見えました。かうして二十日ばかりたちますと、やつと沼ば
たけはすつかりどろどろになりました。次の朝から主人はまるで気が立つて、あちこちか
ら集まつて来た人たちといつしよに、その沼ばたけに緑いろの槍のやうなオリザの苗をい
ちめん植えました。それが十日ばかりで済むと、今度はブドリたちを連れて、今まで手傳
つて貰つた人たちの家へ毎日働きにでかけました。それもやつと一まはり済むと、こんど
はまたじぶんの沼ばたけへ戻つて来て、毎日毎日草取りをはじめました。ブドリの主人の
苗は大きくなつてまるで黒いくらゐるのに、となりの沼ばたけはぼんやりしたうすい緑い
ろでしたから、遠くから見ても、二人の沼ばたけはつきり境まで見わけられました。七
日ばかりで草取りが済むとまたほかへ手傳ひに行きました。ところがある朝、主人はブド
リを連れて、じぶんの沼ばたけを通りながら、俄かに「あつ。」と叫んで棒立ちになつてし

まひました。見ると唇くちびるのいろまで水いろになつて、ぼんやりまつすぐを見つめてゐるのです。

「病氣が出たんだ。」主人がやつと言ひました。

「頭でも痛いんですか。」ブドリはききました。

「おれでないよ。オリザよ。それ。」主人は前のオリザの株かぶを指さしました。ブドリはしやがんでしらべて見ますと、なるほどどの葉にも、いままで見たことのない赤い點點がついてゐました。主人はだまつてしほしほと沼ぬまばたけを一まはりしましたが、家へ歸りはじめました。ブドリも心配してついて行きますと、主人はだまつて手巾てぬぐいを水でしぼつて、頭にのせると、そのまま板の間に寝てしまひました。すると間もなく、主人のおかみさんが表からかけ込んで來ました。

「オリザへ病氣が出たといふのはほんたうかい。」

「ああ、もうだめだよ。」

「どうにかならないのかい。」

「だめだらう、すつかり五年前の通りだ。」

「だから、あたしはあなたに山師をやめろといつたんぢやないか。おぢいさんもあなたにとめたんぢやないか。」

おかみさんはおろおろ泣きはじめました。すると主人が俄かに元氣になつてむつくり起き上りました。

「よし。イーハトーヴオの野原で、指折り数へられる大百姓おほひやくしやうのおれが、こんなことで参るか。よし、來年こそやるぞ。ブドリ、おまへおれのうちへ來てから、まだ一晩も寝たいくらゐ寝たことがないな。さあ、五日でも十日でもいいから、ぐうといふくらゐ寝てしまへ。おれはそのあとで、あすこの沼ぬまばたけでおもしろい手品をやつて見せるからな。その代り今年の冬は、家ぢゆうそばばかり食ふんだぞ。おまへそばは好きだらうが。」

それから主人はさつさと帽子をかぶつて外へ出て行つてしまひました。

ブドリは主人に言はれた通り納屋なやへ入つて睡ねらうと思ひましたが、何だかやつぱり沼ぬまばたけが苦になつて仕方ないので、またのろのろそつちへ行つて見ました。するといつ來て

るたのか、主人がたつた一人腕組みをして土手に立つて居りました。見ると沼ばたけには水がいつばいで、オリザの株は葉をやつと出してゐるだけ、上にはぎらぎら石油が浮んでゐるのでした。主人が言ひました。

「いまおれこの病氣を蒸し殺してみるところだ。」

「石油で病氣の種が死ぬんですか。」とブドリがききますと、主人は、

「頭から石油に漬けられたら、人だつて死ぬだ。」と言ひながら、ほうと息を吸つて首をちぢめました。その時、水下の沼ばたけの持主が、肩をいからして、息を切つてかけて来て、大きな聲でどなりました。

「何だつて油など水へ入れるんだ。みんな流れて来て、おれの方へはいつてるぞ。」

主人は、やけくそに落ちついて答へました。

「何だつて油など水へ入れるつたつて、オリザへ病氣がついたから、油を水へ入れるのだ。」

「何だつてそんならおれの方へ流すんだ。」

「何だつてそんならおまへの方へ流すつたつて、水は流れるから油もついて流れるのだ。」

「そんなら何だつておれの方へ水こないやうに水口とめないんだ。」

「何だつておまへの方へ水行かないやうに水口とめないかつたつて、あすこはおれのみな口でないから水とめないのだ。」

となりの男は、かんかん怒つてしまつてもう物も言へず、いきなりがぶがぶ水へはいつて、自分の水口に泥を積みあげはじめました。主人はにやりと笑ひました。

「あの男はむづかしい男だな。こつちで水をとめると、とめたといつて怒るからわざと向ふにとめさせたのだ。あすこさへとめれば今夜中に水はすつかり草の頭までかかるからな。さあ歸らう。」主人はさきに立つてすたすた家の方へあるきはじめました。

次の朝ブドリはまた主人と沼ばたけへ行つてみました。主人は水の中から葉を一枚とつてしきりにしらべてゐましたが、やつぱり浮かぬ顔でした。その次の日もさうでした。その次の日もさうでした。その次の朝、とうとう主人は決心したやうに言ひました。

「さあブドリ、いよいよここへ蕎麥播きだぞ。おまへあすこへ行つて、となりの水口をこはして來い。」

ブドリは、言はれた通りこはして來ました。石油のはいつた水は、恐ろしい勢でとなりの田へ流れて行きます。きつとまた怒つてくるなと思つてゐますと、ひるごろ例のとなりの持主が、大きな鎌をもつてやつてきました。

「やあ、何だつてひとの田へ石油ながすんだ。」

主人がまた、腹の底から聲を出して答へました。

「石油ながれば何だつて悪いんだ。」

「オリザみんな死ぬでないか。」

「オリザみんな死ぬか、オリザみんな死なないか、まづおれの沼ばたけのオリザ見なよ。今日で四日、頭から石油かぶせたんだ。それでもちやんとこの通りでないか。赤くなつたのは病氣のためで、勢のいいのは石油のためなんだ。おまへの所など、石油がただオリザの足を通るだけでないか。却つていいかもしれないんだ。」

「石油こやしになるのか。」向ふの男は少し顔いろをやはらげました。

「石油こやしになるか、石油こやしにならないか知らないが、とにかく石油は油でないか。」

「それは石油は油だな。」男はすっかり機嫌を直してわらひました。水はどんどん退き、オリザの株は見る見る根もとまで出て來ました。すっかり赤い斑ができて焼けたやうになつてゐます。

「さあ、おれの所ではもうオリザ刈りをやるぞ。」

主人は笑ひながら言つて、それからブドリといつしよに、片つぱしからオリザの株を刈り、跡へすぐ蕎麥を播いて土をかけて歩きました。そしてその年はほんたうに主人の言つたとほり、ブドリの家では蕎麥ばかり食べました。次の春になると主人が言ひました。

「ブドリ、今年は沼ばたけは去年よりは三分の一減つたからな、仕事はよほど樂だ。その代りおまへは、おれの死んだ息子の讀んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといつてわらつたやつらを、あつと言はせるやうな立派なオリザを作る工夫をして呉れ。」

そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。ブドリは仕事のひまに片つばしからそれを讀みました。殊にその中の、クーパーといふ人の物の考へ方を教へた本は面白かつたので何へんも讀みました。またその人が、イーハトーヴオの市で一ヶ月の學校をやつてゐるのを知つて、大へん行つて習ひたいと思つたりしました。

そして早くもその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。それは去年と同じ頃、またオリザに病氣ができかかつたのを、ブドリが木の灰と食鹽を使つて食ひとめたのでした。そして八月のなかばになると、オリザの株はみんなそろつて穂を出し、その穂の一枝ごとに小さな白い花が咲き、花はだんだん水いろの靄にかはつて、風にゆらゆら波をたてるやうになりました。主人はもう得意の絶頂でした。來る人ごとに、

「何のおれも、オリザの山師で四年しくじつたけれども、今年は一度に四年分とれる。これもまたなかなかいいもんだ。」などと言つて自慢するのです。

ところがその次の年はさうは行きませんでした。植ゑ附けの頃からさつぱり雨が降らなかつたために、水路は乾いてしまひ、沼にはひびが入つて、秋のとりいれはやつと冬ぢゆ

う食べるくらゐでした。來年こそと思つてゐましたが、次の年もまた同じやうなひでりでした。それから來年こそ來年こそと思ひながら、ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることができなくなり、馬も賣り、沼ばたけもだんだん賣つてしまつたのでした。

ある秋の日、主人はブドリにつらさうに言ひました。

「ブドリ、おれももとはイーハトーヴオの大百姓だつたし、ずるぶん稼いで來たのだが、たびたびの寒さと早魃のために、いまでは沼ばたけも昔の三分の一になつてしまつたし、もう入れるこやしもないのだ。おれだけでない。來年こやしを買つて入れる人つたら、もうイーハトーヴオにも何人もないだらう。かういふあんばいでは、いつになつておまへにはたらいで貰つた禮をするといふあてもない。おまへも若い働き盛りを、おれのところで暮してしまつてはあんまり氣の毒だから、濟まないがどうかこれを持つて、どこへでも行つていい運を見つけてくれ。」そして主人は一ふくろのお金と新しい紺で染めた麻の服と赤革の靴とをブドリにくれました。

ブドリはいまままでの仕事のひどかつたことも忘れてしまつて、もう何にもいらぬから、

ここで働いてゐたいとも思ひましたが、考へてみると、居てもやつぱり仕事もそんなにな
いので、主人に何べんも何べんも禮を言つて、六年の間はたらいだ沼ばたけと主人に別れ
て、停車場をさして歩きだしました。

四、クーパー大博士

ブドリは二時間ばかり歩いて、停車場へ來ました。それから切符を買つて、イーハトー
ヴォ行きの汽車に乗りました。汽車はいくつもの沼ばたけをどんだんどうんうしろへ送
りながら、もう一散に走りました。その向ふにはたくさんの黒い森が、次から次と形を變
へて、やつぱりうしろの方へ残されて行くのでした。ブドリはいろいろな思ひで胸がいつ
ぱいでした。早くイーハトーヴォの市に着いて、あの親切な本を書いたクーパーといふ人
に會ひ、できるなら、働きながら勉強して、みんながあんなにつらい思ひをしないで沼ば
たけを作るやう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたいと思います
と、汽車さへまどろこくつてたまらないくらゐでした。汽車はその日のひるすぎ、イーハトー

ヴォの市に着きました。停車場を一足出ますと、地面の底から何かのん湧くやうなひ
びきやどんよりとしたくらい空氣、行つたり來たりする澤山の自動車のあひだに、ブドリ
はしばらくぼうとしてつつ立つてしまひました。やつと氣をとりなほして、そこらの人に
クーパー博士の學校へ行くみちをたづねました。すると誰に訊いても、みんなブドリのあ
まりまじめな顔を見て、吹き出しさうにしながら、

「そんな學校は知らんね。」とか、

「もう五六丁行つて訊いて見な。」とかいふのでした。そしてブドリがやつと學校をさが
しあてたのはもう夕方近くでした。その大きなこれはかかつた白い建物の二階で、誰か大
きな聲でしゃべつてゐました。

「今日は。」ブドリは高く叫びました。誰も出てきませんでした。

「今日はあ。」ブドリはあらん限り高く叫びました。するとすぐ頭の上の二階の窓から、
大きな灰いろの頭が出て、めがねが二つぎらりと光りました。それから、

「今授業中だよ、やかましいやつだ。用があるならはいつて來い。」とどなりつけて、す

ぐ頭を引つ込めました。

中では大勢でどつと笑ひ、その人は構はずまた何か大聲でしゃべつてゐます。ブドリはそこで思ひ切つて、なるべく足音をたてないやうに二階にあがつて行きますと、階段のつき當りの扉があいてゐて、じつに大きな教室が、ブドリのまつ正面にあらはれました。中にはさまざまの服装をした學生がぎつしりです。向ふは大きな黒壁になつてゐて、そこにたくさんの白い線が引いてあり、さつきのせいの高い眼がねをかけた人が、大きな櫓の形の模型をあちこち指しながら、さつきのままの高い聲で、みんなに説明して居りました。

ブドリはそれを一目見ると、ああこれは先生の本に書いてあつた歴史の歴史といふことの模型だと思ひました。先生は笑ひながら、一つのとつてを廻しました。模型はがちつと鳴つて奇態な船のやうな形になりました。またがちつとつてを廻すと、模型はこんどは大きなむかでのやうな形に變りました。

みんなはしきりに首をかたむけて、どうもわからんといふ風にしてゐましたが、ブドリにはただ面白かつたのです。

「そこでかういふ圖ができる。」先生は黒い壁へ別の込み入つた圖をどんどん書きました。

左手にもチョークをもつて、さつさと書きました。學生たちもみんな一生けん命そのまねをしました。ブドリもふところから、いままで沼ばだけで持つてゐた汚ない手帳を出して圖を書きとりました。先生はもう書いてしまつて、壇の上にあつた立つて、じろじろ學生たちの席を見まはしてゐます。ブドリも書いてしまつて、その圖を縦横から見えますと、ブドリのとなりで一人の學生が、

「あああ。」とあくびをしました。ブドリはそつとききました。

「ね、この先生は何て言ふんですか。」

すると學生はばかにしたやうに鼻でわらひながら答へました。

「クーパー大博士さ、お前知らなかつたのかい。」それからじろじろブドリのやうすを見ながら、

「はじめから、この圖なんか書けるものか。ぼくでさへ同じ講義をもう六年もきいてゐるんだ。」

と言つてじぶんのノートをふところへしまつてしまひました。その時教室に、ぱつと電燈がつきました。もう夕方だったので。大博士が向ふで言ひました。

「いまや夕べは遙かに來り、拙講もまた全課を了へた。諸君のうちの希望者は、けだしいつもの例により、そのノートをば拙者に示し、更に数箇の試問を受けて、所屬を決すべきである。」學生たちはわあと叫んで、みんなばたばたノートをとぢました。それからそのまま歸つてしまふものが大部分でしたが、五六十人は一列になつて大博士の前をとほりながらノートを開いて見せるのでした。すると大博士はそれを一寸見て、一言か二言質問をして、それから白墨でえりへ、「合」とか、「再來」とか、「奮勵」とか書くのでした。學生はその間、いかにも心配さうに首をちぢめてゐるのですが、それからそつと肩をすぼめて廊下まで出て、友達にそのしるしを讀んで貰つて、よろこんだりしよげたりするのでした。

ぐんぐん試験が濟んで、いよいよブドリ一人になりました。ブドリがその小さな汚ない手帳を出したとき、クーボー大博士は大きなあくびをやりながら、屈んで眼をぐつと手帳

につけるやうにしましたので、手帳はあぶなく大博士に吸ひ込まれさうになりました。

ところが大博士は、うまさうにくくつと一つ息をして、「よろしい、この圖は非常に正しくできてゐる。そのほかのところは、何だ、ははあ、沼ばたけのこやしのこと、馬のたべ物のことかね。では問題を答へなさい。工場の煙突から出るけむりには、どういふ色の種類があるか。」

ブドリは思はず大聲に答へました。

「黒、褐、黄、灰、白、無色。それからこれらの混合です。」

大博士はわらひました。

「無色のけむりは大へんいい。形について言ひたまへ。」

「無風で煙が相當あれば、たての棒にもなりますが、さきはだんだんひろがります。雲の非常に低い日は、棒は雲まで昇つて行つて、そこから横にひろがります。風のある日は、棒は斜になります、その傾きは風の程度に従ひます。波や幾つもきれになるのは、風のためにもよりますが、一つはけむりや煙突のもつ癖のためです。あまり煙の少ないときは、

コルク抜き^{ぬき}の形にもなり、煙も重い瓦斯^{ガス}がまじれば、煙突の口から房^{ふか}になつて、一方乃至四方におちることもあります。」

大博士はまたわらひました。

「よろしい。きみはどういふ仕事をしてゐるのか。」

「仕事をみつけに來たんです。」

「面白い仕事がある。名刺^{めいし}をあげるから、そこへすぐ行きなさい。」博士は名刺をとり出して何かする書き込んでブドリに呉れました。ブドリはおじぎをして、戸口を出て行かうとしますと、大博士はちよつと眼で答へて、

「何だ、ごみを焼いてるのかな。」と低くつぶやきながら、テーブルの上にあつた鞆に、白墨のかけらや、はんけちや、本や、みんな一緒に投げ込んで小脇^{こわき}にかかへ、さつき顔を出した窓から、ブイツと外へ飛び出しました。びつくりしてブドリが窓へかけよつて見ますと、いつか大博士は玩具^{おもちゃ}のやうな小さな飛行船に乗つて、じぶんでハンドルをとりながら、もううす青いもやのこめた町の上を、まつすぐに向ふへ飛んでゐるのでした。ブドリがい

よいよ呆れて見てゐますと、間もなく大博士は、向ふの大きな灰いろの建物の平屋根に着いて、船を何かかぎのやうなものにつなぐと、そのままぼろつと建物の中へ入つて見えなくなつてしまひました。

五、イーハトーヴオ火山局

ブドリが、クーパー大博士から貰^{もら}つた名刺の宛名をたづねて、やつと着いたところは大きな茶いろの建物で、うしろには房^{ふか}のやうな形をした大きな柱が夜のそらにくつきり白く立つて居りました。ブドリは玄關に上つて呼鈴^{よびりん}を押しますと、すぐ人が出て来て、ブドリの出した名刺を受け取り、一目見るとすぐブドリを突き當りの大きな室へ案内しました。

そこにはいままでに見たこともないやうな大きなテーブルがあつて、そのまん中に一人の少し髪の白くなつた人のよささうな立派な人が、きちんと坐つて耳に受話器^{じゆわき}をあてながら何か書いてゐました。そしてブドリの入つて來たのを見ると、すぐ横の椅子を指しながら、また續けて何か書きつけてゐます。

その室の右手の壁いつばいに、イーハトーヴオ全體の地圖が美しく色どつた大きな模型に作つてあつて、鉄道も町も川も野原もみんな一目でわかるやうになつて居り、そのまん中を走るせぼねのやうな山脈と、海岸に沿つて縁をとつたやうになつてゐる山脈、またそれから枝を出して海の中に點點の島をつくつてゐる一列の山山には、みんな赤や橙や黄のあかりがついてゐて、それが代る代る色が變つたり、ジーンと蟬のやうに鳴つたり、数字が現はれたり消えたりしてゐるのです。下の壁に添つた棚には、黒いタイプライターのやうなもの三列に百でもきかないくらゐ並んで、みんなしづかに動いたり鳴つたりしてゐるのです。ブドリがわれを忘れて見とれて居りますと、その人が受話器をこつと置いてふところから名刺入れを出して、一枚の名刺をブドリに出しながら、

「あなたが、グスコブドリ君ですか。私はかう言ふものです。」と言ひました。見ると「イーハトーヴオ火山局技師ペンネンナム」と書いてありました。その人はブドリの挨拶になれないでもじもじしてゐるのを見ると、重ねて親切に言ひました。

「さつきクーパー博士から電話があつたのでお待ちしてゐました。まあこれから、ここで

仕事をしながらしつかり勉強してごらん下さい。この仕事は、去年はじまつたばかりですが、じつに責任のあるもので、それに半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖といふものは、なかなか學問でわかることではないのです。われわれはこれからよほどしつかりやらなければならぬのです。では今晚はあつちにあなたの泊るところがありますから、そこでゆつくりお休み下さい。あしたこの建物中をすつかり案内しますから。」

次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物のなかを一一つれて歩いて貰ひ、さまざまの機械やしかけを詳しく教はりました。その建物のなかのすべての器械はみんなイーハトーヴオ中の三百幾つかの活火山や休火山に續いてゐて、それらの火山の煙や灰を噴いたり、熔岩を流したりしてゐるやうすは勿論、みかけはじつとしてゐる古い火山でも、その中の熔岩や瓦斯のもやうから、山の形の變りやうまで、みんな數字になつたり圖になつたりして、あらはれて來るのです。そして烈しい變化のある度に、模型はみんな別別の音で鳴るのでした。

ブドリはその日からペンネン老技師について、すべての器械の扱ひ方や観測のしかたを習ひ、夜も晝も一心に働いたり勉強したりしました。そして二年ばかりたちますとブドリはほかの人たちと一緒に、あちこちの火山へ器械を据ゑ付けに出されたり、据ゑ付けてある器械の悪くなつたのを修繕にやられたりもするやうになりましたので、もうブドリにはイーハトーヴオの三百幾つの火山と、その働き工合は掌の中にあるやうにわかつて來ました。じつにイーハトーヴオには七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしてゐるのです。五十幾つかの休火山は、いろいろな瓦斯を噴いたり、熱い湯を出したりしてゐました。そして残りの百六七十の死火山のうちにもいつまた何をはじめるかかわからないものもあるのです。

ある日ブドリが老技師とならんで仕事をして居りますと、俄かにサンムトリといふ南方の海岸にある火山がむくむく器械に感じ出して來ました。老技師が叫びました。

「ブドリ君。サンムトリは、今朝まで何もなかつたね。」

「はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見ることがありません。」

「ああ、これはもう噴火が近い。今朝の地震が刺戟したのだ。この山の北十キロのところにはサンムトリの市がある。今度爆發すれば、多分山は三分の一、北側をはねとばして、牛や卓子ぐらゐの岩は熱い灰や瓦斯といつしよに、どしどしサンムトリ市に墜ちてくる。どうしても今のうちにこの海に向いた方へボーリングを入れて傷口をこさえて、瓦斯を抜くか熔岩を出させるかなければならない。今すぐ二人で見に行かう。」二人はすぐに支度して、サンムトリ行きの汽車に乗りました。

六、サンムトリ火山

二人は次の朝、サンムトリの市に着き、ひるごろサンムトリ火山の頂近く、観測器械が置いてある小屋に登りました。そこは、サンムトリ山の古い噴火口の外輪山が、海の方へ向いて缺けた所で、その小屋の窓からながめると、海は青や灰いろの幾つもの縞になつて見え、その中を汽船は黒いけむりを吐き、銀いろの水脈を引いていくつも滑つて居るのでした。

老技師はしづかにすべての観測機を調べ、それからブドリに言ひました。

「きみはこの山はあと何日ぐらゐで噴火すると思ふか。」

「一月はもたないと思ひます。」

「一月はもたない。もう十日ももたない。早く工作してしまはないと、取り返しのできないことになる。私はこの山の海に向いた方では、あすこが一番弱いと思ふ。」

老技師は山腹の谷の上のうすい線の草地を指さしました。そこを雲の影がしづかに青く滑つてゐるのでした。

「あすこには熔岩の層が二つしかない。あとは柔かな火山灰と火山礫の層だ。それにあすこまでは牧場の道も立派にあるから、材料を運ぶことに造作ない。ぼくは工作隊を申請しよう。」

老技師は忙しく局へ発信をはじめました。その時脚の下では、つぶやくやうな微かな音がして、観測小屋はしばらくしぎしぎし軋みました。老技師は器械をはなれました。

「局からすぐ工作隊を出すさうだ。工作隊といつても半分決死隊だ。私はいままでに、こ

んな危険に迫つた仕事をしたことがない。」

「十日のうちにできるでせうか。」

「きつとできる。装置には三日、サンムトリ市の発電所から、電線を引いてくるには五日かかるな。」

技師はしばらく指を折つて考へてゐましたが、やがて安心したやうにまたしづかに言ひました。

「とにかくブドリ君。一つ茶をわかしてのまうではないか、あんまりいい景色だから。」

ブドリは持つて来たアルコールランプに火を入れて茶をわかしはじめました。空にはだんだん雲が出て、それに日ももう落ちたのか、海はさびしい灰いろに變り、たくさんの白い波がしらは、一せいに火山の裾に寄せて來ました。

ふとブドリはすぐ眼の前にいつか見たことのあるをかしな形の小さな飛行船が飛んでゐるのを見つけました。老技師もはねあがりました。

「あ、クーボー君がやつて來た。」ブドリも續いて小屋をとび出しました。飛行船はもう

小屋の左側の大きな岩の壁の上にとまつて、中からせいの高いクーボー大博士がひらりと飛び下りてゐました。博士はしばらくその邊の岩の大きなさげ目をさがしてゐましたが、やつとそれを見つけたと見えて、手早くねぢをしめて飛行船をつなぎました。

「お茶をよばれに來たよ。ゆるるかい。」大博士はにやにやわらつて言ひました。老技師が答へました。

「まだそんなでない。けれどもどうも岩がぼろぼろ上から落ちてゐるらしいんだ。」

ちやうどその時、山は俄かに怒つたやうに鳴り出し、ブドリは眼の前が青くなつたやうに思ひました。山はぐらぐら續けてゆれました。見るとクーボー大博士も老技師もしやがんで岩へしがみついてゐましたし、飛行船も大きな波に乗つた船のやうにゆつくりゆれて居りました。

地震はやつとやみ、クーボー大博士は起きあがつてすたすたと小屋へ入つて行きました。中ではお茶がひつくり返つて、アルコールが青くぼかぼか燃えてゐました。クーボー大博士は器械をすつかり調べて、それから老技師といろいろ話しました。そしてしまひに

言ひました。

「もうどうしても來年は潮汐發電所を全部作つてしまはなければならぬ。それができれば今度のやうな場合にもその日のうちに仕事ができるし、ブドリ君が言つてゐる沼ばたけの肥料も降らせられるんだ。」

「早魃だつてちつともこはなくなるからな。」ペンネン技師も言ひました。ブドリは胸がわくわくしました。山まで踊りあがつてゐるやうに思ひました。じつさい山は、その時烈しくゆれ出して、ブドリは床へ投げ出されてゐたのです。大博士が言ひました。

「やるぞ、やるぞ。いまのはサンムトリの市へも可成感じたにちがひない。」

老技師が言ひました。

「今のはぼくらの足もとから、北へ一キロばかり地表下七百メートルの所で、この小屋の六七十倍ぐらゐるの岩の塊が熔岩の中へ落ち込んだらしいのだ。ところが瓦斯がいよいよ最後の岩の皮をはね飛ばすまでにはそんな塊を百も二百も、じぶんのからだの中にとらなければならぬ。」

大博士はしばらく考へてゐましたが、

「さうだ、僕はこれで失敬しよう。」と言つて小屋を出て、いつかひらりと船に乗つてしまひました。老技師とブドリは、大博士があかりを二三度振つて挨拶しながら山をまはつて向ふへ行くのを見送つてまた小屋に入り、かはるがはる眠つたり観測したりしました。そして魔方麓へ工作隊がきますと、老技師はブドリを一人小屋に残して、昨日指さしたあの草地まで下りて行きました。みんなの聲や、鐵の材料の觸れ合ふ音は、下から風の吹き上げるときは、手にとるやうに聞えました。ペンネン技師からはひつきりなしに、向ふの仕事の進み工合も知らせてよこし、瓦斯の壓力や山の形の變りやうも尋ねて來ました。それから三日の間は、はげしい地震や地鳴りのなかで、ブドリの方も麓の方もほとんど眠るひまさへありませんでした。その四日目の午後、老技師からの發信が言つて來ました。「ブドリ君だな。すつかり支度ができた。急いで下りてきたまへ。觀測の器械は一ぺん調べてそのままにして、他は全部持つてくるのだ。もうその小屋は今日の午後にはなくなるんだから。」

ブドリはすつかり言はれた通りにして山を降りて行きました。そこにはいままで局の倉庫にあつた大きな鐵材が、すつかり櫓に組み立つてゐて、いろいろな器械はもう電流さへ來ればすぐに働き出すばかりになつてゐました。ペンネン技師の頬はげつそり落ち、工作隊の人たちも青ざめて目ばかり光らせながら、それでもみんな笑つてブドリに挨拶しました。

老技師が言ひました。

「では引き上げよう。みんな支度して車に乗り給へ。」

みんなは大急ぎで二十臺の自動車に乗りました。

車は列になつて山の裾を一散にサンムトリの市に走りました。丁度山と市とのまん中どこで、技師は自動車をとめさせました。「ここへ天幕を張り給へ。そしてみんなで眠るんだ。」その午後、老技師は受話器を置いて叫びました。

「さあ電線は届いたぞ。ブドリ君、始めるよ。」老技師はスイッチを入れました。ブドリたちは天幕の外へ出て、サンムトリの中腹を見つめました。野原には、白百合がいちめん